

Analecta Anglica

松 村 恒

略号：AA = Analecta Anglica, AI = Analecta Indica.

VI. —Hearniana：小泉八雲と神戸

小泉八雲が明治27年11月から明治29年8月までの1年9カ月の間神戸に住んでいたことは周知のことではあるが、八雲自身が神戸の地を好かなかったからであろうか、在神中のことをあまり詳しく書き残さず、松江や熊本時代の様にはよくは知られてはいない。第五高等中学での教師生活も限界にきていた折、ふたたび論説記者としての仕事がめぐってきた。文筆をふるう場である『神戸クロニクル』とは、神戸在住の外国人を対象とした英字新聞で、明治24年10月23日の創刊になる。この間の八雲の居住の場はいずこであったかということであるが、必ずしも明確ではない。1994年秋にフィールドワークと称してクラスの学生諸姉若干名と共に探索を開始したのであったが、こと半ばにしてあの阪神大震災である。中断を余儀なくされたが、備忘のために中間迄の報告を以下に記しておきたい。

さて神戸市発行のガイドブックでは生田区中山手通7丁目番外16が「ハーン居宅跡」であるとしている。¹⁾ しかしながらその場に当時の家とか記念碑とかいった目印になるものがあるわけではない。ついでながらこのガイドブックは *Rafcadio Hearn* と綴っていて日本的である。さて八雲は神戸では転居を二度やっている。²⁾ すなわち三カ所の住所が知られる。近時書簡集が写真版も含めて出版されているが、封筒に差出人の住所が記してあるので三

つの住所が確認できるわけである。上記のものは3番目のもので、最初の住所は生田区下山手通4丁目7である。住居表示は当時と今では変わっているので、identificationはそれほど容易ではない。『神戸新聞』平成2.5.17には今の住居表示で中央区山本通4丁目にある建物が八雲が実際に住んだ離れ座敷であると報じている。西川盛雄氏はこれを八雲の1番目の住居であるとしている。³⁾ これらの記事の文面では、これが当時の新発見であるかのような印象を与えが、同じことが『神戸新聞』昭和22.9.5にも報告されているらしい。らしいという表現で恐縮であるが、実はいまだその記事自体を見ていないからで、椎名駿輔氏の文に基づいているからである。⁴⁾ この文には速川和男「八雲と神戸」『小泉八雲の世界』(=笠間選書 94) (東京：笠間書院、1978)、235-245も引かれてあり、その引用文中には発見者として川並秀雄氏の名前が挙げてある。ただ住居表示の点から八雲の最初の家とみてよいのかどうか疑問の生ずるところであるが、宮崎修二郎『神戸文学史夜話』(=天秤パブリックス 3) (神戸：天秤発行所、1964)、35によると、「ハーンが最初に住んだ家が、山本通四丁目二〇ノ一ニ番地に移されたまま、現在までその姿をとどめている」とあり、どうやら建物は移築されたようである。となると番地の変更だけをたどっていくだけでは元の家はわからないことになる。因にここはいまの表示では、山本通2-19で<三好愛真>という表札がかかっている。個人の家なので中は見られないが、床柱の写真は『神戸新聞』に掲載されている。

第2番目の住所は下山手通6丁目26で、居宅跡は掖済会病院の一部になってしまったということである。⁵⁾ この病院の向いに中央労働センターがあり、この敷地内に平成六年に記念碑が建てられて、椎名氏が神戸には「ハーンの文学碑・屋敷跡の碑もなく、松江のそれと比較して淋しい限りである」と嘆いた状況が改善された。同年は八雲来神の百年目に当たり各種の行事が催されたりしたが、この碑の建立もその一環である。建立者は記されていないが、「題字 兵庫県知事 貝原俊民 書」とあるので、県が建てたものかと思われる。日文と英文のバイリンガル・インスクリプションであるが、ア

ショーカ王のバイリンガル碑文の如くには二文はよくは対応してはいない。英文よりも日文の方がふくらんでいるのであるが、「八雲と神戸との出会いは、後に兵庫県知事となった服部一三との交友による」とあって、兵庫県知事の宣伝を忘れてはいない。但し八雲が神戸に来る直接のきっかけになったのは、神戸クロニクル社の編集長ロバート・ヤングが論説記者として八雲を招いたからである。これについては後述する。

八雲の第三番目の住所は、中山手通7丁目番外16で明治期に既に番外はとれて中山手通7丁目16番地となっていたようである。椎名氏は近隣に関帝廟があることに注目し、中国怪談の著者八雲が参詣したことを想像している。

なお神戸クロニクル社は初め生田区栄町通1丁目7で、のち浪花町65に移転した。

さて話を戻して八雲の来神問題を片付けておこう。八雲の来神の直接のきっかけは神戸クロニクルの編集長ロバート・ヤングの誘いによるものであることは疑いのないことであるが、来神にあたっての服部とのかかわりについては知られてはいない。しかしこれは調べて見れば明らかになることであるが、知られていなくて当然だったのである。というのは八雲が熊本から神戸へと移って来たのは1894年のこと、服部が知事として兵庫県にやって来たのは1900年10月25日で、既に八雲が神戸の地を去った後のことであったからである。それまでは服部は長崎県の知事をしていたのであるから、八雲が神戸に来るにあたって服部が関係したことはまず考えられない。従って上引のインスクリプションは<兵庫県知事>をもちあげようという意図のもとに作られたものであって、歴史的事実を記録しておこうというものではないことが想像される。

それでは服部は八雲とは関係がなかったかというとは決してそうではなく、いやむしろ来神などよりももっと重要なことがらに関わっていた。1884年12月16日からニューオーリンズで始まった万国工業兼綿百年期博覧会の日本の部門を担当していた一人が文部省派遣の服部一三であった。この博覧会が二人の出会いを生み出すことになる。この出会いが八雲にとって、また日本に

とって大きな意義を有するものであったことは、八雲の来日を実現するために英語教員の職探しにチェンバレンと共に尽力したのが、ほかならぬこの服部であったからであったことに思いをいたせば、十分に理解できることであろう。服部は八雲の来神ではなくて、来日のために尽力したのであった。必ずしも十分には知られてはいない服部に光をあて、その年譜とともに八雲との出会いを記述したものとして萩原順子氏の好論文⁶⁾があるので参照されたい。この論文によれば、服部は単に職の斡旋をしたというよりも、八雲に日本行きを決心させる程の人物であったようである。八雲に影響を与えたのは兵庫県知事としての服部では決してなく、日本文化の伝達者としての服部なのであった。我々はプロパガンダを目的としたインスクリプションにゆめ惑わされてはならない。

付：ジョセフ・ヒコの記念碑

八雲とは直接の関係を持たないことであるが、次のことをも記しておこう。先程の八雲の居址として述べた掖済会病院にはジョセフ・ヒコの碑が建っている。「神戸クロニクルの論説記者であったハーンの住んでいたあたりが我国最初の民間新聞「海外新聞」の創始者ジョセフ・ヒコの住居跡であったとは、不思議な因縁を感ずる⁷⁾」と言われるように、八雲のここの住居に関連してジョセフ・ヒコのそれも大抵言及されている。⁸⁾ 尾崎氏はジョセフ・ヒコの碑の刻文を転写して発表しておられるが、若干誤植があるので、あらためて正確を期した転写をここに与えておこう。

THE OLD RESIDENCE / OF / JOSEPH HECO / PIONEER OF
JAPANESE NEWSPAPER / 1875-1888

者始創聞新聞民邦本 / 址居氏コヒフセヨジ

氏ハモト濱田彦蔵トイヒ縣下加古 / 郡阿閉村ニ生ル嘉永三年十五歳ノ / 時米
國ニ漂流シ安政六年歸朝ス / 慶應元年海外新聞ヲ創刊シ明治八年 / 本市ニ來

り貿易ニ従事ス同二十一年／東京ニ去ル迄此西隣ニ居住セリ

(上段横書きにして日本語は右書き、下段縦書き)

- 1) 神戸市経済局貿易観光課編『史跡こうべ』(神戸：神戸国際観光協会, 1975), 66.
- 2) 細かいことを言うと、移動は3回あった。明治27年10月10日頃に神戸に到着したが、初めの10日程は住居探しのためホテルに滞在した様である。20日頃に下山手通四丁目七番地に入居する。明治28年7月に山手通六丁目二十六番地へ、同年12月下旬に中山手通七丁目番外十六へと転居している。ところで明治28年1月30日には神戸クロニクル社を退職しているから、神戸時代の大半は無職で文筆に専念して過ごしていたことになる。
- 3) 「ハーンの神戸・東京時代」熊本大学小泉八雲研究会『ラフカディオ・ハーン再考－百年後の熊本から』(東京：恒文社, 1993), 265.
- 4) 「八雲と神戸の旧居」『へるん』20(1983.6), 11-12
- 5) 同12.
- 6) 「小泉八雲と服部一三 一万国工業兼綿百年期博覧会での邂逅」『国際関係研究』(日本大学国際関係学部国際関係研究所) 9-2(1988.12), 217-233.
- 7) 尾崎孝「「へるん」探訪－神戸にて」『へるん』20(1983.6), 26.
- 8) 椎名前掲論文によれば、中山手通6丁目29の和洋二棟の家であったという。この「二棟」という表現が、二階建てを意味しているのであれば、『ラフカディオ・ハーン著作集』15(東京：恒文社, 1988), 720に掲載されている写真がそれに当たる可能性が高い。しかしこの写真のキャプションには「ハーン神戸時代の旧居(「ジャパン・クロニクル」紙, 一九四一年十月二十二日より)」としかなく、ジャパニクロニクルの前身であった神戸クロニクルと八雲の関係は一番目の住居時代だけに限られるので、このあたり色々と齟齬が生ずる。状況の好転を見て再調査を期したい。尚『同書』688には兵庫大仏の写真もあり、「場所不明」とされているが、兵庫区北逆瀬川町の能福寺境内の露仏である。これは明治22年起工、24年3月15日落成、同年5月8日より7日間開眼供養式が行われたのである(『神戸市史』本編各説(神戸：神戸市役所, 1924), 81-82)。八雲が見た仏は大戦時の金属回収に供出されて無くなってしまったが、今時再建立されている。尚往時の毘盧舎那仏の写真は次のものにも収められている：荒尾親成『明治・大正 神戸のおもかげ集』第一集(神戸：中央印刷, 1969; 1975), 36。大谷正信「個人としての小泉八雲先生」『帝国文学』10(1904), 107によると、八雲は明治28年7月7日に大谷と共に兵庫大仏を訪れている。

Ⅶ. ———— チョーサーからリドゲイト迄の英国寓話の変遷

大陸諸国に比べて中世のブリテン島では動物寓話はさほどには隆盛を見なかった。従って成文化された作品の数も多くはなかった。しかし皆無という訳ではなく、脈々とした伝統はあったが、言及される機会は少なく、概説書の類いでもそれに頁が割かれることは纔であった。Max Plessow, *Geschichte der Fabeldichtung in England bis zu John Gay (1726)* (= Palaestra 52) (Berlin: Mayer & Müller, 1906) はこの主題に関する珍しい専著であり、引用されることも稀であるので、その一部の訳註を『プリンス通信』36-38号 (Mar. 1994), §70にて試みた。発行後一世紀にもなんなんとしていかにも古色蒼然としているが、今尚これに代わるものが見当たらないのでこの部門に携わるにあたって参照を怠ることができないことと、当時のドイツの Anglistik への郷愁から、継続をここに試みる。二次文献の翻訳の意義については、AA IIIにて述べた通りである。部分部分の訳稿は以前にできていたが、メモ的なものに過ぎなかったことに加えて、使用器具の変更にともない文書ファイルをコンヴァートしたがその結果が必ずしもはかばかしくなかった。従って訳文は翻訳の域には程遠く、またぞろくないよりまし>などのフレーズが持ち出される。

今回は S. XXXVIII-XLIV 5. Von Chaucer bis Lydgate の箇所。脚註はすべて訳者のもの。略号は CA = Confessio Amantis, CT = Canterbury Tales, GC = Geoffrey Chaucer, JG = John Gower, RH = Robert Henryson, TC = Troilus and Criseyde.

——— ** —— ** —— ** ——

英国への動物詩の導入のうち最も目を惹くのはチョーサーによる『カンタベリー物語』中のあの見事な「雄鶏と狐の物語」である (ed. W. Skeat, Oxford 1894, IV 271ff.)。¹⁾ これの影響は、リドゲイト、ヘンリソン、スペンサー、更にはドライデンにも認められる。『狐物語』第2枝篇²⁾に関連し

て、尼付き僧の口から楽しい物語が語られるのを聞くことができる。しかしそれはその元となったものからは大幅に離れている。これの材源は早い時期から寓話文学中に押し入っていた。その証拠にマリー・ド・フランスの「雄鶏と狐の寓話」³⁾に、夢解きはでてこないものの、この物語の骨格は用いられている(=カクストン V, 3)⁴⁾。雄鶏シャントクレールがいかにしてずるがしこい狐ダウン・ラッセルにひと泡吹かせたかについての巧みな語り口は非常にもてはやされ、かつよく知られているところであるので、今さら筆者が詳しく語る必要もないであろう。ただチャーサーは上述のシャントクレールとペルテローテの間に語られる夢物語に非常な学殖を散りばめたのであった。

チャーサーが他にも動物物語の語りに巧みであったことは、「家扶の物語」4054-56行にも暗示されている。

「一番偉い学者が一番賢いというわけではありませんから。」

狼に牝馬がこう言ったそうだ。

だからあいつらのやることなんざ、どってことないさ。

『狐物語』の第17枝篇とそれの十四世紀前半の改作である『偽作ルナール』⁵⁾では、狼と牝馬との間の出来事が描かれている。牝馬は狼に自分の後ろ足に書かれている文字を読んでごらんと唆し、後ろに廻った狼をこっぴどく蹴飛ばして、うまくだまして狼の悪しき企みを打ち砕いたのであった。カクストンの『レイナルド』27章⁶⁾では、狼は仔馬を買いたいからといって牝馬に近づく。牝馬は値段は後ろ足に書いてあるよと言い、ここでこの出来事の証人であり張本人として上の言を語るのは狐である。イソップ寓話集に現われた牝馬と狼の会見については、既にXXXV頁にて触れたところである。⁷⁾

注目すべきことにチャーサーは『薔薇物語』の翻訳では、イサングリン卿、ティベルス、ダン・ベリンといった動物物語にでてくる名前を挙げてはいないが、狐の息子ルナールは『善女物語』(2448行)⁸⁾に登場する。

チャーサーは他にもイソップ寓話を依用していた。「メリベウスの物語」2370行でイソップを証人に仕立てている。そこでイソップが言うには、「君

がかつて戦ったり、敵対関係にあった様な人を信じてはならなし、君の秘密を話してもいけない」(=カクストン V, 8)⁹⁾。『トロイラスとクレシーダ』には「柏と葦の寓話」が二箇所に見られている：1巻257行「たわみ曲がる鞭の方が折れる鞭よりもましである」、2巻1387-89行「風が吹く度にいともたやすくなびく葦は風が止めば立ち直るけれど、樅の木は一度倒れたらそうはいかない」¹⁰⁾ (=カクストン IV, 20)¹¹⁾。陶器と青銅器の寓話はバラード「真実」12行に反映している。「土器が石壁に対する様に争ってはいけない」¹²⁾ (=アウイアーヌス 9)¹³⁾。「騎士の物語」1177-80行では「ぼくらは丁度獵犬が獲物を求める様に争っている。獵犬は一日中争っても、結局何も得られない。いがみあっている間に、鳶がやって来て、二頭の間にある獲物をかっさらっていくということさ。」この寓話はかなり改変されているので、鹿を求めて争うのは獅子と虎か、或いは獅子と熊かで (Croxall Fab.60)、鹿はその間に狐に盗られてしまう。猛鳥は鼠と蛙の争いか、雄鶏同士の争いのときにしか現われない。最後に「バースの女房の物語」のプロローグ692行を挙げておこう。「誰が獅子の絵を描いたのですか。」これは人と獅子の対話中に現われる。この寓話は先ずアウイアーヌス (寓話24)¹⁴⁾ に現われ、後に他の多くの集成本にも取り入れられた。例えばロムルス集 (IV, 15)¹⁶⁾ がそうである。そこでは「描かれた絵」ではなくて、石に刻まれた獅子が話題となっている (=カクストン IV, 15)¹⁶⁾。

チャーサーと同時代のガワーは『恋する男の告解』(ed. Macaulay, Oxford 1899)にて、多くの物語を寓話と呼んでいる。しかし寓話という表現は長ったらしい作品には適当ではない。個々の物語の素材を動物寓話に仰いでいるというに過ぎないからである。5巻4937-5162行のアドリアヌスとバルドゥスの物語において、すべての生き物の中で人間が一番恩知らずであることを示すために、人と猿と蛇の寓話が語られている¹⁷⁾。この寓話はリヒャルト・レーヴェンヘルツが報告しているもので、そこでは猿が獅子に置き換えられている。ガワーはこの素材を大いに膨らましている。2巻291行以下に語られる妬み深く欲張りな男の寓話はアウイアーヌスに基づいている。¹⁸⁾ ガ

ワーにあってはジュピターからは天使が人間に遣わされるのであるが、ア
ウィアーヌスではペブスが、更に後のプロカーでは（第107寓話）アポロが
派遣される。

今日現存するイソップ寓話の英語版として最初のまとまったものは、極め
て不完全なものであるとは言え、やはりリドゲイトのものに指を折る。この
イソップの名が冠せられた集成本は（ed. Sauerstein, Anglia IX 1ff.）序文と
7つの寓話から成り¹⁹⁾、その内容についてはザウアーシュタインが学位論文
の中で詳細に論じている。彼はこの作品を1388年と1390年の間に置いている
が、それは第7寓話「犬と影の話」が14世紀に書かれたAshm.写本59.IIに確
かに存在するからである。この時期はリドゲイトがまだオックスフォードの
学生であった頃で、青年期の作品には韻文の扱いに習熟していないことや表
現が洗練されていないことが言われている。しかしながら我々はリドゲイト
がオックスフォードの学生であった時期を1388年より前であったとしなけれ
ばならない。それは1389年には既にバリー聖エドモンドの副助祭に任ぜられ
ており、修道院に入る前にフランスとイタリアに向けて旅立っていたはずだ
からである。更に素材の配置や扱いを見ると、リドゲイトはこの寓話集を修
道僧であった時期に書いたことが予想される。寓話をすべて読むと我々はオ
ドや聖職者を直ちに想起する。著者にとって道徳的内容が重要なのであって、
寓話自体は二の次であった。冗長な語り口がそれを物語っているのではないか。
彼は可能な限り説教自体を前面に押し出し、そこに寓話をはめ込んだのである
から、読者そして恐らくは聴衆に印象づけるためにたとえを次々と入れたの
である。第1寓話からして説教臭い聖職者や同類の者を示している。この雄
鶏と宝石の話の叙述の中で、雄鶏が石を見つけると、徳と悪徳、怠惰と勤勉
について長い議論が続き、次の様な言葉のくだくだしい教訓で締めくくられ
る。「世俗的な者は富みのために働く。彼のすべての意向は世俗に向けられ
る。美德は一切の怠惰を避けるべくそれ自身で満足を知る。人はそれぞれ神
が送り出した様に主に感謝し、徳の内に確と自らを保つ。」第2寓話「狼と羊
の話」では、狼は貪欲な人に、仔羊は貧しい人に譬えられる。貧しいけれど

仁徳があり満足して暮している者は褒められる。一方横暴な者には地獄が迫ってくる。論争詩の形式で綴られた第3寓話では、リドゲイトは111行目から最終の224行目にかけて大いなる誤謬が神に生ずる様な虚偽の陪審員と虚偽の証人を扱っている。残りの寓話でも事情は同様であり、神とか信仰への言及が全般的に強い調子で現われると同時に、貧しい者へ入信を強く勧めている。第1寓話を別とすれば、リドゲイトはすべての寓話の前に比較的長い導入部を置き、これから始る寓話によって説明される主題を前もって道德化して教えている。

この寓話集の詩的価値は乏しく、模倣もされなかった。最大の欠陥は過度の冗漫さにあり、彼の学識から来る多くの比較や譬えが屢々適切さを欠いて、煩わしく退屈に作用している。例えば第5寓話の「鼠と蛙の話」では63から110行目にかけて、対応する内容ごとに次の名前が続々と挙げられる：クレサス、ミダス、サラモン、ディオゲネス、アリサウンデル、プリアムス、オーロラ、バックス、テトゥス。他にも同様な例は見られる。プロローグから寓話への移行部と本来の寓話部と教訓部に一致が見られる。この受容は、マリーの『二人の愛人の歌』(Lai des deuz amanz) を英訳しているという様にリドゲイトがマリー・ド・フランスを知っていた事実からも確かめられる。リドゲイトの寓話はマリーの初めの7話に相当し、順序だけが異なっている。第1, 2, 6は同じであるが、第3, 4, 5, 7にはマリーの第4, 7, 3, 5が対応する。ロムルスとウォルターも近い関係にあるが、考慮からは外される。というのは牛と羊と山羊と獅子の話というリドゲイトにはないものを第6の位置に持っているからである。リドゲイトは各話の終わりに、「これでこれこれのイソペの話はおしまい」と明瞭な終結の辞を置いている。例えば第2話の終わりには「これでイソペの第2話はおしまい」云々とある。第4話の後にはこの終結の辞がないが、これは書写生のミスによるものであろう。更に第2話と第3話の標題の前に何番目かを表す上書きがある。もし種本と異なった順序になっているのであれば、リドゲイト自身が書いたのではなかろう。この寓話集はそれが書きあがった直後に文字に書かれたのであるから、様々な形

態があることが後代の書き写しに由来するということは有り得えない。更に詩人はその材源がフランス語で書かれていたことをたとえ纒かにでも暗示させるような痕跡をどこにも残してはいない。逆にプロローグには重要な意味を持つ乖離が見られる。フランスの女流詩人の方は自分の諸寓話をギリシア語原典に遡らせているのに対し、リドゲイトの方はギリシアを無視すること皇帝ロムルスの如きであった。リドゲイトはイソップのことを、ローマ滞在中に元老を喜ばせるために寓話を詩作したローマの詩人であると看做していたのである。「それだから私はこの詩人に従い、彼の寓話を英語に訳すことにしたのです。」(プロローグ29行) このあたりの言はリドゲイトがラテン語の本に基づいていたことを示唆するが、そのラテン語本とは恐らくはマリーの寓話集のラテン語訳のことであろう。そうであればマリーの寓話集との順序の異なりも説明がつく。

雄鶏と宝石の寓話においてもリドゲイトはシャンティクレール(動物物語中に用いられた唯一の名前である)の様子を描くにあたって、チャーサーの「雄鶏と狐」を念頭に置いている。またプロローグにもチャーサーから借用した様な箇所がある。

リドゲイトにはイソップの訳の他にも、馬・鷲鳥・羊の物語が挙げられる(ed. Degenbart, *Müchener Beiträge z. rom. und engl. Phil.* 19)。²⁰⁾ これは詩人によって冒頭に寓話として選ばれていると述べられているものの、論争詩に近いものとなっている。三匹の動物のそれぞれが自分の長所を自慢し、人間にとって自分が最も有用であると信じている。この論争を裁くのは獅子と鷲であり、三匹にそれぞれの運命に満足する様にと勧める。この寓話を用いてリドゲイトはあらゆる立場が平等であることを主張しているわけである。この素材のパラレルは『ゲスタ・ローマーノールム』やニコラ・ボゾン『道徳話』にも見られる。

バルラームとヨサファット伝説に出てくる農夫と鳥の物語もリドゲイトによって長々しい詩にされている(ed. Halliwell, *A selection from the minor poems of Dan John L.*, Percy Soc. II 179)。²¹⁾ これはペトルス・アルフォン

ス『教養人への手引き』のフランス語訳に基づいている様である。²³⁾

鳥の物語では、鳥が妻の不実をペブスにこぼし、白い羽と美しい鳴き声を取り上げられてしまうのであるが、イソップ寓話の形態からは大いに乖離している。これの材源は『七賢人物語』のフランス語訳である。²³⁾

リドゲイトのその他の詩にも動物寓話を下敷きにしてしているものはまだある。

英語版『ゲスタ・ローマーノールム』(EETS XXXIII)は15世紀の初めに現われたが、夥しい数の寓話を含んでいる。ラテン語原本のうち主としてオドに由来する個々の寓話は翻訳されていないが、原本にはないオドからの9話が新たに採択されている。

- 1) The Nun's Priest's Tale. [Facs.] *GCh The Works 1532* (Ilkley: The Scholar P. Limited, 1969, 1976), f.101v-104v. *GCh The CT* (Cambridge: Magdalene College, 1972) [Pepys's copy]. *Poetical Works GCh. A Facsimile of Cambridge University Library MS GG. 4.27*, with Introduction by M.B. Parkers & Richard Beadle II (Cambridge: D.S. Brewer, 1980), [343]-351v. *The Ellesmere Ms of Ch's CT A Working Facsimile* (Cambridge: D.S. Brewer, 1988). [Facs.&Ed.] Paul G. Ruggiers, *The CT GCh A Facsimile and Transcription of the Hengwrt Ms with Variants from the Ellesmere Ms.* (Norman: U. of Oklahoma P., 1978), 392-423. [Ed.] *The CT of Ch III* (London: T. Payne, 1775; repr. New York: AMS, 1972), 40-64. Alexander Chalmers, *The Works of the English Poets from Ch to Couper I* (London, 1810; repr. [= Anglistica & Americana 51] Hildesheim: Olms, 1970), 127-132. Thomas Tywhitt, *The CT of Ch*, with memoir and critical dissertation by George Gilfillan (Edinburgh: James Nichol, 1860), 106-124. Harris Nicolas, *The Poetical Works of GCh III*, The Aldin Edition (London: Benn and Daldy, 1866; repr. New York: AMS, 1972), 229-248. Walter W. Skeat, *The Complete Works of GCh*, 2nd ed. (Oxford: Clarendon P., 1900, 1963), IV. 271-288 (text), V. 248-258 (notes). Lilian Winstanley, *Ch The Nonnë Prestes Tale* (= Pitt Press Series) (Cambridge: U.P., 1926). Kenneth Sisam, *C The Nun's Priest's Tale* (Oxford: Clarendon P., 1927, 1965). John M. Manly & Edith Rickert, *The Text of the CT* (Chicago: The U. of Chicago P., 1940), II. 414-423 (Classification of the Mss), IV. 256-280 (Text and Critical Notes), VII. 551-614 (Corpus of Variants). E. Talbot Donaldson, *Medieval and Renaissance Poets* (= Poets of the English Language) (New York: The Viking P., 1950, 1972⁹), 203-224. E.T. Donaldson, *Ch's Poetry: An Anthology for the Modern Reader* (New York: The Ronald P. Company, 1958), 369-389. Neville Coghill and Christopher Tolkien, *Ch The Nun's*

Priest's Tale (= Harrap's English Classics) (London: George G. Harrap, 1959, 1975). Daniel Cook, *The CT of GCh* (= Anchor Books A265) (New York: Doubleday & Company, 292-317). Albert C. Baugh, *Ch's Major Poetry* (London: Routledge & Kegan Paul, 1963), 371-381. Maurice Hussey, *The Nun's Priest's Prologue & Tales* (= Selected Tales from Ch) (Cambridge: UP, 1965). Robert A. Pratt, *The T of C complete GCh* (Boston: Houghton Mifflin, 1966, 1974), 234-252. Francis King and Bruce Steele, *Ch: the prologue and three tales* (Melbourne: Cheshire, 1969), 110-142, 203-207 (comm.). Nevill Coghill, *A Choice of Ch's Verse* (London: Faber & Faber, 1972), 136-151 [ll. 62-350 with omissions]. F.N. Robinson, ed., *The (Complete) Works of GCh*, 2nd ed. (Oxford: OUP, 1974, 1979⁴), 199-205. John H. Fisher, *The Complete Poetry and Prose of GCh* (New York: Holt, Rinehart and Winston, 1977), 297-307. N.F. Blake, *The CT by GCh Edited from the Hengwrt Ms* (London: Edward Arnold, 1980), 561-580. Derek Pearsall, *The CT part The Nun's Priest's Tale* (= A Variorum Edition of the Works of GCh, vol. 2 pt.1) (Norman: U. of Oklahoma P., 1983). Larry D. Benson, *The Riverside Ch*, 3rd ed. (Boston: Houghton Mifflin, 1987), 253-261. [Ed.&Tr.] A. Kent Hiatt and Constance Hiatt, *Ch CT* (= A Bantam Dual-Language Book) (New York: Bantam Books, 1964), 384-413. Pedro Guardia, *Godofredo Chaucer Los Cuentos de Canterbury* (= erasmo textos bilingües) (Barcelona: Bosch, 1978), 514-549. [Tr.] John S.P. Tatlock and Percy MacKaye, *The Modern Reader's Ch: The Complete Poetical Works of GCh* (1912; repr. New York: The Free P., 1966), 130-140. 金子健二『カンタベリ物語』上 (=世界奇書異聞類聚1) (東京: 国際文献刊行会、1917)、327-348. J.U. Nicolson, *GCh CT* (= The Programmed Classics) (Atlanta: Communication & Studies Inc., 1934), 265-281. R.M. Lumiansky, *The CT by GCh* (New York: Rinehart, 1948), 188-199. 吉田新吾『キャンタベリ物語』(大阪: 創元社、1949)、193-214. Theodore Morrison, *The Portable Ch* (= The Viking Portable Library) (New York: The Viking P., 1949, 1972¹³), 200-218. 西脇順三郎『カンタベリ物語』(=世界文学全集第二期古典編7) (東京: 河出書房、1951)、289-298 = 『チョーサーラブレー』(=世界文学大系8) (東京: 筑摩、1961)、169-175 = 『チョーサーラブレー』(=筑摩世界文学大系12) (1972)、201-208. Nevill Coghill, *GCh The CT* (= The Penguin Classics) (Harmondsworth, Middlesex: The Penguin Books, 1951, rev. 1975), 232-249 = An illustrated selection (1978), 181-196 = *The CT GCh* (London: Century Hutchinson, 1951, 1986), 135-143. David Wright, *GCh The CT* (London: Barrie and Rockliff, 1964), 129-137. Donald R. Howard, *GCh The CT A Selection* (= Sighnet Classic CY 468) (New York, New American Library, 1969), 242-260. David Wright, *GCh The CT* (Oxford: OUP, 1985), 202-218. Michael Murphy, *GCh The CT: The General Prologue and Twelve Major Tales in Modern Spelling* (Lanham: U.P. of America, 1991), 355-375. 榊井迪夫『完訳カンタベリ物語』下 (=岩波文庫 赤203-3) (東京: 岩波、1995)、50-72. [Summ.] T.W. Craik, *The Comic Tales of Ch* (London: Methuen, 1964), 71-87. Trevor Whittock, *A Reading of the CT* (Cambridge: U.P., 1968), 228-250. [Comm.] Henry Barrett Hinckley, *Notes on Ch: A Commentary on the Prolog and Six CT* (New York: Haskell House, 1964),

- 121-156. Ralph W.V. Elliott, *The Nun's Priest's Tale and the Pardoner's Tale* (= Notes on English Literature) (Oxford: Basil Blackwell, 1965), 7-39. Cf. James R. Hulbert, "The Nun's Priest's Tale," in W.F. Bryan and Germaine Dempster, eds., *Sources and Analogues of Ch's CT* (London: Routledge & Kegan Paul, 1941, 1958), 645-663. Stephen Manning, "The Nun's Morality and the Medieval Attitude toward Fables," *Journal of English and Germanic Philology* 59 (1960), 403-416. Kate Oelzner Petersen, *On the Sources of The Nonne Prestes Tale* (New York: Haskell House, 1966). Helen Cooper, *The CT* (= Oxford Guide to Ch) (Oxford: Clarendon P., 1989), 338-356.
- 2) [Ed.] M.D.-M. Meon, *Le roman de Renart I* (Paris: Treuttel et Wurtz, 1826). Ernest Martin, *Le roman de Renart I* (Strasbourg: Trübner, 1882). Mario Roques, *Le roman de Renart II* (= Les classiques français du moyen âge 79) (Paris: Champion, 1969), 26-38. Jean Dufournet, *Le roman de Renart (Branches I, II, III, IV, V, VIII, X, XV)* ([Paris]: Garnier-Flammaion, 1970), 175-226. S. Suzuki, N. Fukumoto et N. Harano, *Le roman de Renart I* (Tokio: France-Tosho, 1983). [Ed. & Tr.] Micheline de Combarieu du Grès et Jean Subrenat, *Le roman de Renart I* (= Bibliothèque médiévale 1437) (Paris: Union Générale d'Éditions, 1981), 144-173. [Tr.] Marc Boyon et Jean Frappier, *Le roman de Renart* (= Classiques Larousse) (Paris: Larousse, 1937), 11-15. Robert Bossuat, *Le roman de Renard* (= Connaissance des lettres 49) (Paris: Hatier-Boivin, 1957), 12-17. 山田壽『中世文学集』★ (=世界文学大系 65) (東京: 筑摩、1962)、97-102 = 『中世文学集』(筑摩世界文学大系 10) (1974), 368-376. Paulin Paris, *Le roman de Renart* ([Paris]: Éditions André Balland, 1963), 24-33. Jacques Haumont, *Le roman de Renart* (Paris: L'Édition d'Art H. Piazza, 1966), 8-18. *Le roman de Renart I* (= Collection folio junior 20) ([Paris]: Gallimard, 1977), 20-30. Patricia Terry, *Renard the Fox* (Berkeley: University of California Press, 1992), 25-63. 鈴木覺『狐物語』(東京: 白水社、1994), 41-52. [Summ.] Maurice Genevoix, *Le roman de Renard* ([Paris]: Plon, 1968), 23-30. Cf. Léopold Sudre, *Les sources du roman de Renart* (Paris, 1892; repr. Genève: Slatkine Reprints, 1974), 273-288.
- 3) 60 Del cok e del gupil. [Ed.] Karl Warnke, *Die Fabeln* (= Bibliotheca Normannica 6) (Halle, 1889; repr. Genève: Slatkine, 1974). A. Ewert and R.C. Johnston, *Marie de France Fables* (= Blackwell's French Texts) (Oxford: Basil Blackwell, 1942, 1966), 41-42 [No.32]. Yorio Otaka, *Marie de France vers complètes* (Tokio: Maison d'Édition Kazama, 1987), 308-309. [Ed.&Tr.] Hans Ulrich Gumbrecht, *Marie de France Aesop* (= Klassische Texte des romanischen Mittelalters in zweisprachigen Ausgabe 12) (München: Finck, 1973). Mary Lou Martin, *The Fables of Marie de France* (Birmingham: Summa Publications, 1979, 1988), 160-163. Harriet Spiegel, *Marie de France Fables* (= Toronto Medieval Texts and Translations 5) (Toronto: U. of Toronto P., 1987), 169-171.

- 4) V,3 The foxe and the cocke. [Facs.] *The English Experience* 439 (Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum Ltd., 1972), f.79r-v. [Ed.] Joseph Jacobs, *The Fables of Aesop as first printed by William Caxton in 1484 with those of Avian, Alfonso and Poggio II* (= Bibliothèque de Carabas) (London: David Nutt, 1889). R.T. Lanaghan, *Caxton's Aesop* (Cambridge, Mass.: Harvard U.P., 1967), 138-139. [Tr.] 伊藤正義『ウィリアム キャクストン イソップ寓話集』(東京: 岩波ブックサービスセンター、1995)、69-70。当然のことながらカクストンと同系の他の寓話集にも同話類話がみられる。例えば、Hermann Österley, *Steinhöwels Äsop* (= Bibliothek des Literarischen Vereins in Stuttgart 117) (Tübingen: L.F. Fues, 1873), 196-197. Bengt Holbek, *Æsops levned og fabler: Christiern Pedersens oversættelse af Steinhöwels Æsop* (København: Schultz, 1961-62), 93v-94v cum II. 180-181 [No.116]。『古活字本伊曾保物語』下三(『伊曾保物語』(=十銭文庫5)(東京: 百華書店、1911), 81-83。笹川種郎『仮名草子集』(=近代日本文学大系1)(東京: 国民図書、1928), 82-84。森田武『仮名草子集』(=日本古典文学大系90)(東京: 岩波、1965)、434-435。『仮名草子』(=岩崎文庫貴重本叢刊<近世編>2)(東京: 貴重本刊行会、1974), 80-81 [四ウ-五ウ]。『古活字本伊曾保物語』(=勉誠社文庫13)(東京: 勉誠社、1976), 156-158。朝倉治彦『仮名草子集成』2(東京: 東京堂、1981)、424-425。『同』3(1982), 58-59, 145, 230-231。大塚光信『キリシタン版エソポのハブラス私注』(京都: 臨川、1983), 217-218。飯野純英『古活字版伊曾保物語』(=大学古典叢書7)(東京: 勉誠社、1986), 101-102。遠藤潤一『伊曾保物語第二種本の翻刻と本文研究』(東京: 風間書房、1993), 103-104)。散文パエドルス Cf. Ben Edwin Perry, *Babrius and Phaedrus* (= Loeb 436) (London: Heinemann, 1965), App. No.562=p.525。ヘンリソン『寓話集』3 ([Facs.] *The Morall Fabillis of Esope the Phygian* (Edinburgh, 1570; repr. *The English Experience* 282 Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum Ltd., 1970), Biv v-Civ r. [Ed.] A.R. Diebler, "H's Fabeln," *Anglia* 9 (1886), 354-360。G. Gregory Smith, *The Poem of RH*, 3 vols. (= The Scottish Text Society ser. I, nos. 64, 55, 58) (Edinburgh: William Blackwood and Sons, 1914, 06, 08; repr. New York: Johnson Reprint Corporation, 1968), II. 243-250 cum I. 10-12。Harvey Wood, *The Poems and Fables of RH Schoolmaster of Dunfermline* (Edinburgh: Oliver and Boyd, 1933), 17-24。Charles Elliott, *RH Poems* (= Clarendon Medieval and Tudor Series) (Oxford: Clarendon Press, 1963), 13-19。Denton Fox, *The Poem of RH* (Oxford: OUP, 1981), 19-27。W.R.J. Barron, *RH Selected Poems* (= Fyfield Books) (Manchester: Carcanet, 1981), 58-65。[Ed. & Tr.] George D. Gopen, *The Moral Fables of Aesop by RH* (Notre Dame: U. of Notre Dame P., 1987), 60-71。Cf. John MacQueen, *RH: A Study of the Major Narrative Poems* (Oxford: Clarendon Press, 1967), 135-148。AT 6, 61 = Antti Aarne - Stith Thompson, *The Types of the Folktale: a classification and bibliography*, Second Revision (= FFC 184) (Helsinki Suomalainen Tiedekatemia, 1973). 23, 34-35. K561.1, K721 = S. Thompson, *Motif-Index of Folk-Literature*, rev. and enlarged ed., 6 vols. (Bloomington: Indiana UP, 1955) IV. 318-319, 333。Cf. Theodor Benfey, *Pantschatantra I* (Leipzig, 1859; Nachdr. Hildesheim: Olms, 1966), 610。

- 5) [Ed.] Gaston Raynaud et Henri Lemaitre, *Renard le contrefait* (1914) [未見].
- 6) [Facs.] *The Historye of Reynart the Fox* (1489; repr. Cambridge: Paradine in Association with Magdalene College, 1976), eirer. *The Booke of Raynarde the Foxe* (London, 1550; repr. The English Experience 162, Amsterdam, 1969), Jviii v-Li r. [Ed.] William J. Thoms, *The History of Reynard the Fox* (London: The Percy Society, 1844), 79-89. Donald B. Sands, *The History of Reynard the Fox: translated and printed by William Caxton in 1481* (Cambridge, Mass.: Harvard U.P., 1960), 113-122. N.F. Blake, *The History of Reynard the Fox* (= EETS o.s.263) (London, 1970), 55-62. [Tr.] F.S. Ellis, *The History of Reynard the Fox with some account of his friends and enemies* (London: David Nutt, 1897), 138-141. William Swan Stallybrass, *The Epic of the Beast: Consisting of English Translations of The History of Reynard the Fox and Physiologus* (= Broadway Translations) (London: George Routledge & Sons Ltd., s.d.), 73-82.
- 7) そこでは、Bullokar, Valla Fab. 27, Rimicius Fab. 77 が挙げられている。
- 8) [Facs.] *GCh The Works 1532*. [Ed.] Chalmers 317. Skeat III.166. Robinson 516. Benson 627. [Tr.] James J. Donohue, *Ch's Lesser Poems Complete in present-day English* (Dubugue: Loras College P., 1974), 133.
- 9) イソップ系のパラレルは、アウグスターナ C81, H96 ([Ed.] Aevilivs Chambry, *Aesopi fabvlae* (= Nouvelle collection de textes et documents) (Paris: Les Belles Lettres, 1926), 168-171. Ben Edwin Perry, *Aesopica I* (Urbana: The U. of Illinois P., 1952), 341 [No.51]. Avgvstvs Havsrath, *Corpvs Fabvlarvm Aesopicarvm I, i* (= Bibliotheca Scriptorvm Graecorvm et Romanorvm Tevbneriana) (Lipsiae: Tevbneri, 1957), 70-71. [Ed.&Tr.] Émile Chambry, *Ésope Fables* (= Collection des Universites de France) (Paris: Les Belles Lettres, 1927), 37-38. [Tr.] S.A. Handford, *Fables of Aesop* (= The Penguin Classics L43) (Middlesex: Penguin Books, 1954), 54 [No.52]. 山本光雄『アイソーポス寓話集』(=岩波文庫 2963-2965) (東京:岩波、1942) 75=『イソップ寓話集』(=岩波クラシックス 46) (1983)、74. 河野与一『イソップのお話』(=岩波少年文庫 109) (東京:岩波、1955), 66-67. 二宮フサ『イソップの寓話』(東京:白水社、1971), 62. 同『イソップ童話』下 (=偕成社文庫 2073) (東京:偕成社、1983), 166-167.; 渡辺和雄『イソップ寓話集』I (東京:小学館、1982), 114. 『伊索寓言』([香港]:雅文出版社 s.d.), 98-99)。散文パエドルス Perry App. No.697 = pp.589-591, cf. also No.537a = pp.530-531. Steinhöwel V-8. Marie de France 63. 他に『ローマ人の事蹟』141 (Hermann Oesterley, *Gesta Romanorum* (Berlin, 1872; repr. Hildesheim: Olms, 1963), 495-496. Charles Swan, *GR: or, Entertaining Moral Stories*, rev. and corrected by Wynnard Hooper (Bohn, 1876; repr. New York: Dover, 1959), 246-247. Johann Georg Theodor Grässe, *GR: Die Taten der Römer, Ein Geschichtenbuch des Mittelalters*, hrsg. und neu bearbeitet von Hans Eckart Rübesamen (=

- Heyne-Paperbacks 5) (München, 1962) II .1-3. 山崎光子『世界童話大系』1 (東京：世界童話大系刊行会、1925; repr. 東京：名著普及会、1988)、349-350. 金子健二『ジェスタ・ロマノーラム』(東京：宝文館、1928)、508-512. 伊藤正義『ゲスタ・ロマノーラム』(東京：篠崎書林、1988)、555-558. [MEGR] Sindney J.H. Herrtage, *The Early English Versions of the GR* (= EETS e.s.33) (London, 1879), No.LIX = pp.242-245). 『グリム童話集』105. Charles Lamb, "The Boy and Snake," *The Works of Charles and Mary Lamb*, ed. by E.V. Lucas, vol.(4) (London: Methuen, 1903), 360-361. K. Briggs, *A Dictionary of British Folk-Tales* (London: Routledge & Kegan Paul, 1971), III. 765-766. AT 285. B391, B491.1, B580, J15. Cf. Benfey I, 359-365.
- 10) [Facs.] *TC GCh: A Facsimile of Corpus Christi College Cambridge Ms 61*, with introduction by M.B. Parkers & Elizabeth Salter (Cambridge: D.S. Brewer, 1978). [Ed.] Chalmers I. Robert Kilburn Root, *The Book of TC by GCh* (Princeton: Princeton U.P., 1926, 1954), 15, 123. P.K. Gordon, *The Story of T as told by Benoît de Sainte-Maure, Giovanni Boccaccio, GCh, Robert Henryson* (= A Dutton Paperback D138) (New York: Dutton, 1934; repr. Mediaeval Academy Reprints for Teaching 2, Toronto: U. of Toronto P., 1964). Donaldson, *Gh's Poetry*. Daniel Cook, *TC by GCh* (= Anchor Books A524) (New York: Doubleday & Company, 1966). John Warrington, *GCh TC*, rev. by Waldwyn Mills (London: Dent, 1974), 12, 102. Robinson 392, 416. B.A. Windeatt, *GCh TC: a new edition of 'The Book of Troilus'* (London: Longman, 1984), 102-103, 226-227. Benson 476, 508. R.A. Shoaf, *GCh TC* (East Lansing: Colleagues P., 1989), 13, 98. [Tr.] 刈田元司『恋のとりこ』(=英米名著叢書) (1948; repr. 東京：伸光社, 1983), 13, 90. R.M. Lumiansky, *GCh's TC* (Columbia: U. of South Carolina P., 1952). Margaret Stanley Wrench, *TC by GCh* (London: Centaur P., 1965), 25, 97. Nevill Coghill, *GCh TC* (= Penguin Classics) (Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1971, 1980), 12, 94. 宮本武志『トゥローイラスとクリセイデ』(東京：こびあん書房、1987), 8, 83.
- 11) パラレルは、アウグスターナ C₁101d=C₂143; H179b (Io. Gottlob Schneider, *MTΘ OI A I Σ Ω Π Ε Ι O I, Fabulae Aesopiae e codice Avgvstano* (Vratislaviae: Svmtibvs Librariae Io. Frid. Kornii, 1812), 202-203. Chambry 202-203. Perry 348 [No.70]. Havsrath I.i, 96 [Nr.71], I.ii (1959), 59-61 [Nr.239]. Chambry 64. Handford 145 [No.141] 山本 118. 河野 146. 二宮 95. 二宮 上96-97. 渡辺 I.135. 伊索 111-112)。パブリオス 36 ([Ed.] A. Eberhard, *Babrii Fabulas* (Berolini: Weidmann, 1875), 24. Maria Jagrađa Luzzatto et Antonius La Penna, *Babrii Mythiambi Aesopei* (= BSGT) (Leipzig: Teubner, 1986), 37-38. [Ed. & Tr.] Perry 5-51. Léon Herrmann, *Babrius et ses poèmes* (= Collection Latomus 135) (Bruxelles: Latomus, 1973), 151 [N° 41]. [Tr.] Denison B. Hull, *Aesop's Fables told by Valerius Babrius* (Chicago: The U. of Chicago P., 1960). 『神戸親和女子大学英語英文学』14 (1994), 53-54)。アウイアーヌス 16 ([Ed.] Robinson Ellis, *The Fables of Avianus* (Oxford, 1887; repr. Hildesheim: Olms, 1966), 18-19 cum 78-80. Léopold Hervieux, *Les fabulistes*

latins depuis le siècle d'Auguste jusqu'à la fin du moyen âge III (Paris: Firman-Didot, 1894; repr. Hildesheim: Olms, 1970), 273. [Ed. & Tr.] J. Wight Duff & Arnold M. Duff, *Minor Latin Poets* (= Loeb 284) (London: Heinemann, 1934; rev. ed. 1935, 1954), 706-707. L. Herrmann, *Avianus Œuvres* (= Collection Latomus 96) (1968), 40-41. Françoise Gaide, *Avianus Fables* (= Collection des Universités de France) (Paris: Les Belles Lettres, 1980), 94-95. Esopono fabvlas 下三 (新村出『文禄旧訳天草本伊曾保物語』(東京:改造社、1928), 157-159 = 『新村出全集』7 (東京:筑摩、1973)、338. 京都大学文学部国語学国文学研究室『文禄二年耶蘇会板伊曾保物語』(京都:京都大学国文学会、1963), 65-66. 井上章『天草版伊曾保物語』(東京:風間書房、1964), 471-472. 『天草版伊曾保物語』(=勉誠社文庫3) (東京:勉誠社、1976), 65-66. 今泉忠義『ESOPONO FABVLAS』(東京:桜楓社、1959), 471-472. 新村出・柘原一『吉利支丹文学集』下(=日本古典全書)(東京:朝日新聞社、1960), 283 = 東洋文庫 570 (東京:平凡社, 1993), 296. 大塚 61-62. 新村出『イソップ物語』(=日本児童文庫 27) (東京:アルス、1928; repr. 東京:名著普及会、1982), 103-104 = 『全集』7, 585-586)。ラ・フォンテーヌ『寓話』I-22 (エディション等については AI XI 参照)。Johannes Bolte, *Johannes Pauli, Schimpf und Ernst* (= *Alte Erzähler* 1) (Berlin, 1924), 174. Иван Андреевич Крылов, *Басни* I.2 (или I.4) ([Ed.] *Сочинения* II (Москва: Художественная литература, 1955), 8-9 cum 463-464. *Басни* (= Академия Наук СССР отделение литературы и языка Литературные памятники) (Москва: Издательство Академии Наук СССР, 1956), 8-9 cum 318-325. *Басни* (Ленинград: Художественная литература, 1983), 11-12. *Сочинения* II (Москва: Художественная литература, 1984), 458 cum 691. [Tr.] Bernard Pares, *Krylov's Fables* (London: Butler and Tanner, 1926), 27-28. 吉原武安『寓話』上(=世界古典文庫 41) (東京:日本評論社、1948), 21-23. 峯俊夫『寓話』(東京:国文社、1988), 7. 内海周平『寓話』(=岩波文庫) (東京:岩波、1993), 14-15. Cf. V. Kenevič, *Bibliografičeskija i istoričeskija Primčanija k Basnjam Krylova* (S.-Peterburg: I.I. Glazunov, 1878; Neudr. Leipzig: Zentralantiquariat der deutschen Demokratischen Republik, 1974), 1-8. Н. Степанов, *Крылов* (= Жизнь замечательных людей серия биографий выпуск 16 (372)) (Москва: Молодая гвардия: 1963), 133-139)。J832. Cf. Albrecht Weber, *Indische Studien* III (Berlin: Ferd. Dimmler, 1855), 355-356.

- 12) [Facs.] *GCh The Works 1532*. [Ed.] Walter W. Skeat, *Ch The Legend of Good Women* (= Clarendon Press Series) (Oxford: Clarendon P., 1889), 113. Skeat I.390. Donalson, *Ch's Poetry*. Robinson 536. George B. Pace and Alfred David, *The Minor Poems*, Pt.i (= A Variorum Edition of the Works of GCh 5) (Norman: U. of Oklahoma P., 1981), 62. Benson 653. [Tr.] Morrison 592. Donoghue 251. 佐藤勉『チョーサー 小詩の世界』(東京:高文堂、1976; 増補改訂 1985), 21.
- 13) Auyan 9 Two pottes. ラテン語本では No.11 である (Ellis 13-14. Hervieux 270-271. Duff 698-701. Hermann 37. Gaide 89-90.)。パラレルは、アウグスターナ C₁355 = C₂354 (Perry 477 [No.378]. Chambry 153)。ラ・フォンテーヌ V-2. Крылов VII. 12

- (Сочинения162-163 cum 480. Басни196-197 cum 466. Басни324-325. Сочинения 608-609 cum 708. Pares 212-213. 吉原下 111-112. 峯 214. 内海 223-224. Cf. Kenevič 222-223)。H. Österley, *H. W. Kirchof: Wendunmuth* (= BLVS 95-99) (Tübingen, 1896), vii.117a. J425.1. 旧約外典『集会の書』13:2 (*The Old Testament according to the Authorised Version with a brief commentary. The Apocryphal Books, Esdras to Maccabees* (London: Society for Promoting Christian Knowledge, 1880). *The Apocrypha* (Oxford: U.P., 1895), 256. Edgar J. Goodspeed, *The Apocrypha* (Chicago: Chicago U.P., 1938, 1965⁹), 247. *The New English Bible. The Apocrypha* (Oxford: OUP, 1970), 178)。Cf. Benfey I.346.
- 14) Ellis 27-28. Hervieux 278. Duff 718-721. Herrmann 47-48. Gaide 104.
- 15) [Ed.] Hermann Oesterley, *Romulus: die Paraphrasen des Phaedrus und die Aesopische Fabel im Mittelalter* (Berlin: Weidmann, 1870). Hervieux, *Les fabulistes latins* (1894), II.195-761. Georg Thiele, *Der lateinische Äsop des Romulus und die Prosa-Fassungen des Phaedrus* (Heidelberg: C. Winter, 1910).
- 16) 散文パエドルス App.No.284. アウグスターナ C59, H63 (Perry 432 [No.284]. Havsrath 84-85 [Nr.264]. Chambry 29. Handford 18 [No.16]). ラ・フォンテーヌ III-10. Marie de France 69 Del leün e del gupil (Ewert-Jonston 43-45 [No.15]. Martin 174-178 [No.68]. Spiegel 18-183.)。Kirchof i.80. **J1454**.
- 17) [Ed.] Henry Morley, *Tales of the Seven Deadly Sins being the CA of JG* (= The Carisbrooke Library 2) (London: George Routledge Routledge and Sons, 1889), 276-279. G.C. Macaulay, *The Complete Works of JG III* (Oxford: Clarendon P., 1901), 81-87 = *The English Works of JG II* (= EETS e.s. 82) (London, 1901, 1957), 81-87. Russell A. Peck, *JG CA* (New York: Host, Rinehart and Winston, 1968; repr. (= Medieval Academy Reprints for Teaching 9) Toronto: U. of Toronto., 1980), 294-300. [Tr.] 伊藤正義『恋する男の告解』(東京: 篠崎書林、1980), 505-509.
- 18) Avianus 22 (Ellis 24-26. Hervieux 276-277. Herrmann 46. Gaide 101-102) である。ガワー自身 *Mirour de l'omme* 3234-3240 ([Ed.] Macaulay, *The Complete Works of JG I* (1899), 40. [Tr.] William Burton Wilson, *JG. Mirour de l'Omme (The Mirror of Mankind)* (= Medieval Texts and Studies 5) (East Lansing: Colleagues P., 1992), 48) にも言及している。カクストンでは Auyan 17 である。パラレルは、『古活字本伊曾保物語』下二十一 (十銭 103-104. 笹川 102-103. 森田 455-456. 岩崎 100-101 [二四ウ-二五ウ]. 勉誠社 196-198. 朝倉 II.438-439, III.73-74, 160, 245. 大塚 235-236. 飯野 125-126. 遠藤 127-129.)。T. F. Crane, *The Exempla or illustrative stories from the sermons vulgares of Jacques de Vitry* (= Publications 26) (London: Folk-lore Society, 1890; repr. Liechtenstein, 1961), 196. Pauli 647. **AT1331. J2074**. Cf. Benfey I.498, 304.

- 19) [Ed.] P. Sauerstein, "Lydgate's *Æsop*übersetzung. (Ms. Harl. 2251) ," *Anglia* 9 (1886), 1-24. Henry Noble MacCracken, *The Minor Poems of John Lydgate II* (= EETS o.s.192) (London, 1934), 566-599.
- 20) [Ed.] Frederick J. Furnivall, *Political, Religious, and Love Poems* (= EETS o.s.15) (London, 1866; re-ed. 1903), 15-35. MacCracken 539-566. Curt F. Bühler, "Lydgate's *Horse, Sheep and Goose* and Huntington Ms. HM 144," *Modern Language Notes* 55 (1940), 563-569 [additional stanzas].
- 21) [Ed.] Eleanor Prescott Hammond, *English Verse between Chaucer and Surrey* (Durham N.C., 1927; repr. New York: Octagon Books, 1965), 102-110. MacCracken 468-485.
- 22) この物語の類話を徹底的に収集分析したものとして、Franz Tyroller, *Die Fable von dem Mann und dem Vogel in ihrer Verbreitung in der Weltliteratur* (= Literarhistorische Forschungen 51) (Berlin: Emil Felber, 1912). それ以降のものについては、Hisashi Matsumura, "Le lai de l'oiselet in Oriental Literature," *Kalyāṇa-mitta Professor Hajime Nakamura Felicitation Volume* (= Bibliotheca Indo-Buddhica 86) (Delhi: Satguru, 1991), 1-14. リドゲイトの出典を探った最新の研究として、Lenora K. Wolfgang, " "Out of the Frenssh": Lydgate's Source of the *Churl and the Bird*," *English Language Notes* 32 (1995), 10-22.
- 23) 『七賢人物語』の諸本については、『七賢人物語』 (= プリンス通信・Beiheft 2) (Kobe: Omega Verlag, 1994) の序を参照。詳しい書誌としては、Hans R. Runte, J. Keith Wikeley and Anthony J. Farrell, *The Seven Sages of Rome and the Book of Sindbad: An Analytical Bibliography* (= Garland Reference Library of the Humanities 387) (New York: Garland, 1984).

(科研一般研究「シュタインハーヴェル系寓話集成本の構成分析並びにその伝播に関する研究」の一部をなす)

VIII. —— 『今昔物語集』の英訳をめぐって

AA IV にてダイクトラ博士の仕事に関連して私見を述べたが、その折に同博士には『今昔物語集』の英訳もあることにも言及した。この翻訳は¹⁾ 今日まで出版されている『今昔』の西欧語訳のうちでは²⁾ 量的にも一番大きいものであり、天竺部をすべてカバーしているという点でその意義は大きく、訳者の労は多としなければならない。この仕事は研究史上に正しく

位置付ける必要があるので、同書への書評には期待されるものがある。このたび書評のひとつ³⁾を眼にする機会を得たが、多々疑問の点が生じたので今後の展開のためにも所感をまとめておきたい。

先ずこの書評の読後の印象として、書評者の視点が極めて限られた点にのみ偏向していて、本書が日本古典文学の英訳であるということを殊更に無視している点が挙げられる。『今昔』の現代日本語訳に関してすら我々はひとつの完訳⁴⁾しか持たない事実からしても、『今昔』の翻訳が如何に難事であるか窺えよう。また訳文への言及が一切ない翻訳書への書評は成り立つのであろうか。⁵⁾

次に書評者の『今昔』に対する理解が通常のそれとはかなり異なっていることを示す表現に度々出くわす。異論の余地が少ない数字の問題から始めよう。書評者は『今昔』の話数を1065とするが(258.10 = 258頁10行目)、8,18,21の欠巻を無視すれば名目の上では1079であり、7巻と23巻の一括しての欠話分を除けば1059となるので、書評者の挙げる数字は不可解である。初めの5巻すなわち天竺部の話数を書評者は3回にわたって185であるとするが(259.9,17,21)、1巻から5巻までの話数はそれぞれ38,41,35,41,32であるので合計は187となる(標題のみのものも含めて数える⁶⁾)。また書評者は『今昔』所収の話进行分类して、1-9巻、11-20巻を仏教起源の話とし、10巻及び22-31巻を世俗的性格の話としている(259.12-16)。この列举の仕方では21巻が見当たらない。欠巻のためということかもしれないが、しかし上に述べた様に欠巻は計3巻であるので、残りの2巻との扱いの違いは如何に説明されるのであろうか。しかも書評者はこの分類を『今昔』所収話の二つの分類法の第2のものとしているのである。書評者に依れば第1の分類法は<天竺><震旦><本朝>の三分法であり、第2が<仏法><世俗>ということである。『今昔』自身の各巻の標題書きを見れば第1のものは問題がないが、第2のものについては、この二分法が今昔編者自身が意図していたものかどうか尚検討を要しよう。鈴鹿本・紅梅文庫本を底本とした日本古典文学大系本によって各巻の標題に添えられた付記を見ると、1-3天竺、4天竺付仏後、5天竺仏前、6-7震

旦付仏法、8 欠、9 震旦付孝養、10 震旦付国史、11-17 本朝付仏法、18 欠、19-20 本朝付仏法、21 欠、22-23 本朝、24-25 本朝付世俗、26 本朝付宿報、27 本朝付靈鬼、28 本朝付世俗、29 本朝付悪行、30-31 本朝付雑事 となっていて、その構成は書評者が考えている程単純ではない。欠巻部をも含めた全体の構成に関する研究は列挙に暇がない程であるので、ここでは〈二話一類〉方式を指摘した国東氏の画期的な業績⁷⁾ を挙げるにとどめよう。

『今昔』の成立並びに伝承に関して書評者は次の様に述べる。「この集成本が上記のタイトルの許に言及されたのは1451年であるが、通常学者は本書の成立年代を12世紀の初めに置いている。」(258.13-16) 『今昔』の成立に関しては様々な説が提出されて完全な一致を見ないが、1120年代の成立というのは有力な説のひとつであるので、この文の後半は問題がない。しかし前半の意味するところは不明である。1451年に起こった出来事について書評者は何も述べないので、書評者の真の意図はわかりにくい。また「上記のタイトル」という言葉が差し示すのは今昔物語集しか考えようがないが、もしそうであれば不十分な記述となる。すなわち〈今昔物語集〉という題名は最古の写本であるばかりか、現存諸本の祖本とされている鈴鹿本以来のものである。言い替えば本集は成立以来この名で呼ばれていたものであり、また「集」を欠いた略称を別とすれば、この名でのみ呼ばれ続けてきた。憶測すれば、書評者は『宇治大納言物語』との混同に関して何かを述べたかったのかもしれないが、書評の文章だけでは不明である。読者に憶測を要求するのであれば、学術的な文とは言えまい。

上引の文に続いて「その時以来『今昔』は *popular tales* の重要な集成本として評価され続けてきた。それはその含む内容が広範にわたると同時に興味深いものであったからである」(258.16-18) とあるが、これは『今昔』の受容史に対する理解を欠いた発言である。本書は成立後中世を通じて広く流布したり他の作品に影響を与えたという痕跡は認められず、直接の引用は宝永3年(1706)の『本朝語園』迄待たねばならなかった。⁸⁾ 近世文学への影響を与える基となったのは享保年間に井沢蟠龍による改編本である。文学的に

高い評価が与えられるようになるにあたって芥川龍之介の評論⁹⁾がきっかけのひとつとなったことは有名な事実である。従って「そのユニークさと重要性の故に日本及び西欧の学者の注目を惹くこととなった」(258.20-259.1)という言も訂正が要る。西欧での言及は日本と並列的ではなく、日本での評価が高いものによってからであるからである。その次の「several selected chapters が西欧語に訳された」(259.1-2)というのも、書評者はこの書評を通じて chapter を「巻」の意味で使っているから、stories としなくてはなるまい。¹⁰⁾ 同一の巻すべてにわたる西欧語訳は Dykstra 訳が初めてであるからである。

Dykstra 訳で扱われている部分は天竺部であるから、インド起源の固有名詞が頻出する。仏教関係の日本語にはその読み方が独特のものがあり、エディションの編者は振り仮名を施す際に苦心したことであろう。これらの成果をローマ字にて転写して訳文中に与えるのは正当なことであり、これをサンスクリット名に還元して与えることは日本名を不明にしてしまうことでもありむしろ好ましくない。『今昔』は日本文学中の作品であり、日本語で理解するのが基本だからである。書評者はDykstra訳では固有名詞が日本語の転写で与えてあるからといって非難し、¹¹⁾ 若干のサンスクリット対応語を列挙している(60.15-21)。しかしそれらはいずれも自明のもので、言わずもがなの感のするものばかりである。¹²⁾ 書評者がもしその主張を貫くのであれば、巻1第25の「和羅多」はどう処理するのであろうか。まさかRāṣṭrapālaとしてこと足れりというのではあるまい。訳者はインド起源の固有名詞については初出の際に対応するサンスクリット形を注記に与えている。書評者はこれに付加符号が落ちていたり、綴りの誤りがあるといって糾弾する。¹³⁾ 確かに厳密であるに越したことはないが、インド学の専著でもない限り、付加符号などは技術的に困難なこともある。書評者自身の引くインド語にも、Mahāyāna sūtra (260.10), Sakko devānam indo (Pali) (260.12),¹⁴⁾ Rāmāyaṇa (261.2), Kaccapa-Jātaka (261.11) といったような誤植が見られる。日本語にも Setswa (259.28) という誤記がある。「中国式の転写に慣れている西欧の読

者は日本名からサンスクリット形に直すのに相当な困難に直面するであろう」(260.23-25)という言葉は筆者には全く理解不能である。日本文学を読むのに中国語で読んだり、サンスクリットに転換しながら読んだりする読者が書評者の他にいるのであろうか。¹⁵⁾

より重要なことは出典に関するところがらである。天竺部はインド伝来の物語を集載しているのであるから、とうぜん仏典にその類話が求められる可能性が高い。岡本保孝以来大蔵経中に類話を探す作業は続けられ、数々の典籍を博搜した芳賀矢一にてひとつのピークを迎えた。大系本の頭注も若干の増補は見られるものの、基本的には芳賀の延長線上にある。しかしながら今日の今昔研究は今昔の編者が使用した文献の数を抑える傾向に進み、それまで列挙されていた仏教文献の多くは出典の座から降ろされることとなった。書評者は訳注が不備であるとして、主としてパーリ・ジャータカから類話をいくつか挙げるが、漢訳仏典すらも出典からはずされつつある時期に、パーリ語のものを何のコメントもなしに並べても、その意義は薄い。「巻5第26は *Mātiposaka-Jātaka* の日本語版以外の何ものでもない」(261.22)という言い方では、まるで後者が出典であるかの様な印象を与えてしまう。しかも挙げられているパーリ・ジャータカは大系本の頭注にもすべて指摘されており、またジャータカの対照表にも『今昔』の相応箇所が挙げられているので、書評の指摘には何らの新味もない。それ位であるなら、大系本の時代には殆ど利用されなかった『注好選』などの関連箇所を指示した方がまだましであった。

それでは書評者の類話の挙げ方はいかなるものであろうか。巻5第4一角仙人に関連する網羅的な文献目録としてLamotteの『大智度論』の訳注を参照させ、それへの追加としてSimsonの論文を挙げる。しかしながらLamotteのリストは主として一次資料を列挙したものであるから、二次文献をそこに付加するとすればSimsonのものを挙げるだけではとても足りない。しかもLamotteのリストは極めて有益であるとはいえ、日本のものは全く視野に入れていないので、『今昔』との関わりからするならば『本生経類照合全表』の当該箇所¹⁶⁾を参照させた方がよかったかもしれない。¹⁷⁾ 更に「鳴神」を

西欧で最初に指摘した人としてLüdersの名を日本の学者は忘れてはならないとするが(261.5-7)、これは完全な誤りではないにしても若干のコメントが必要である。日本の一角仙人に初めて言及して西欧人はF.W.K.Müllerである。¹⁸⁾ 更にこれを受けて日本人が英語で論文を発表し、¹⁹⁾ Lüdersはそれを基にして発言しているわけである。書評者はLüdersの論文を後に編纂された論文集から引いているが、「初めて」云々の議論をするのであれば当然初出の書誌情報を与えておくべきであった。尚Lüdersにはこれを主題とする論文はふたつある。²⁰⁾

巻5第13三獣についてはこれまた『今昔』とは無縁のAlsdorfの論文のみが挙がっている(261.8-9)。それより後に現われたSchlingloffのもの²¹⁾を追加したところで事態はあまり変わらない。ここではむしろ民話に関するものを指摘する方がより有益であろう。²²⁾

巻5第24亀については問題が多い。「Kaccapa-Jātaka (Sic) から派生した」(261.10-11)という表現が不適切であるのは言うを俟たないが、続く“it appears in the *Sanskrit Reader* of C.R. Lanman” (261.12-13)という文のitはどうしてもKacchapa-Jātakaを指してしまうことになる。ところがLanmanのReaderに含まれているのはHitopadeśa IV.2である。パラレルを指摘するのにPañcatantra 1.13(261.13)というような述べ方では伝本の極めて多い同書に関してはわかりにくい。Pañcatantraは特定の書というよりもジャンルの名前と考えて具体的なエディションに基づいて参照させるのでなければ意味がない。²³⁾ 古シリア語をOld Syrian(261.14)とは通常はいわない。Old Syriacである。『今昔』のこの物語の構成については近時興味深い考察がなされている。²⁴⁾

その他にもパーリ・ジャータカの名がいくつか並べられているが、『今昔』との関わりについては何も触れられず、益するところはない。書評者は訳書に類話の注記がないことに不満を述べているが(261.24-27)、どうしてパーリ・ジャータカにこうまでこだわるのであろうか。書評者が述べるところでは「この英訳によってインド起源の物語が、時として変形改変されながらも、

12世紀の極東に伝播していったさまを見ることができる」(259.20-24)ということであるが、間接的には共通の起源を有すると言えども、インド文献と『今昔』を並列的に並べて眺めるだけで伝播の過程がわかるとするのは余りに安易に過ぎるし幻想に近い。前述の如く『今昔』の編者は限られた資料に依拠したと考えられるようになっていのであるから、当面はその直接資料もしくはそれに近いものを考察するのが出典研究の課題となろう。だから『今昔』のコンテキストで仏の年代に関して、Bechertの論文とゲッティンゲンのシンポジウムを挙げねばならないとする(260.28-30)のは的外れである。いずれも日本文学の文脈で仏の年代を論じたものではないからである。それよりも直接の関連を持つもの²⁵⁾に触れなければならない。

書評者の誤解は結びの言によく現われている。Dykstra氏が怠った「今昔諸話とサンスクリット、パーリ、仏教混淆梵語、中国語、中央アジア諸語のヒンドゥー仏教資料との入念な比較は、真摯な日本のインド学者の仕事となろう。」(261.29-33)このような作業は別に誰がやってもよいことであって、「日本の」とか「インド」だとかの限定詞を付す必要はなかろう。そしてこれはそれなりに意義のある研究課題ではあるが、注意しておかなければならないのは、それは個々の物語の研究であって、『今昔』の研究ではないことである。前述の如く、『今昔』の出典受容の研究はやはり日本文学史のコンテキスト内で進められるものであろう。

学術的な書評とは、当該書を研究史の中に正しく位置付けて妥当なる評価を与えるものでなくてはならない。扱われている主題に関して十分な知識を持たずに、偏った立場から一方的な所感を述べるだけでは、それは書評の名に値しない。²⁶⁾

- 1) Yoshiko Kurata Dykstra, *The Konjaku Tales Indian Section (Tenjiku Hen), from a Medieval Japanese Collection*, 2 parts (= Intercultural Research Institute Monograph Series 17 & 18) (Hirakata: Kansai University of Foreign Studies Publication, 1986).
- 2) “Quellen der indischen Erzählungen im Konjakumonogatarishū,” *Kobe International University Review* 43 (Dec. 1992), 13-41 にて若干の西欧語訳を列挙したが、まだま

だ不十分である。より網羅的な書誌の作成が期待される。

- 3) *Acta Orientalia* 50 (1989), 258-261.
- 4) 永積安明・池上洵一『今昔物語集』(=東洋文庫 80, 89, 96, 104, 112, 120, 368, 374, 379, 383) (東京:平凡社, 1966-80).
- 5) 訳文に関しては別稿を用意しているので、ここでは省略する。
- 6) Dykstra氏は標題のみのものをも訳している(勿論標題だけであるが)。巻1第24は標題だけで本文を欠くが、大系頭注(p.101 n.2)では第24の標題中に現われる郁伽長者に付けるべき「舎衛国の長者」という注が混乱をきたし、次の第25の和羅多に対する注へ混入してしまっている(cf. Matsumura, "Quellen," Anm. 16)。英訳でもこの誤りを無批判に踏襲している(p.128 n.1)。
- 7) 国東文麿『今昔物語集成立考』(東京:早稲田大学出版部、1962;増補版1978)。国東氏の今昔構造説が初めて提唱されたのは「今昔物語集構想論」『国文学研究』6(1952)以下の論文であるが、通常国東説はこれ及び関連する論文の内容を包括した『成立考』によって言及されることが多い。Dykstra氏は巻末の書誌目録のこの書を挙げているが、にもかかわらず(p.250)、序論では国東氏の所説を「今昔物語の説話と組織の独自性」『日本の説話』2(東京:東京美術、1974)、240-262並びに、国東氏の説を要約したBernard Frankの訳書の序に基づいている(p.24 n.7)。この挙げ方は Marian Ury, *Tales of Times Now Past: Sixty-Two Stories from a Medieval Japanese Collection* (Berkeley: U. of California P., 1979), p.6 n.2 と同一である。
- 8) 出典表は、倉島節尚『本朝語園』上(=古典文庫 445) (東京:古典文庫、1983)、20-60。Cf. also 塚田晃信「『今昔物語集』の近世における受容の一端」『東洋大学短期大学紀要』14(1983), 15-26.
- 9) 芥川龍之介「今昔物語鑑賞」『日本文学講座』6(東京:新潮社、1927), 69-74=『今昔物語集』(=日本文学研究資料叢書)(東京:有精堂, 1970), 140-143=『全集』8(東京:岩波, 1978), 446-453 cum 521-522。尚『全集』13(岩波, 1955), 74-80では「今昔物語に就いて」という題になっている。
- 10) 巻をchapterと訳するのは習慣化している様である:Dykstra, p.37, Ury, p.3.
- 11) この件に関しては訳者自身がp.58にその処置の理由について述べている。
- 12) 事実書評に挙がっているものはすべて訳書に与えられているものばかりで、書評者が新たに付け加えたものはひとつもない。それ程迄にサンスクリット形を挙げるのが大事であるというのならば、p.92 n.6 俱伽利 *Kokāli*, p.99 n.2 *Pūrṇa*, p.110 n.1 尼拘類 *pippala*, p.118 n.4 甘露飯王 *King Amṛta-rāja*, p.125 n.6 須陀洹果 *srotāpanna*, p.157

n.1 paricitra, p.184 n.2 僧祇律 sāṅghikāḥ, p.188 n.1 槃頭磨 (『今昔』末) 帝 Pāṇduma をそれぞれ Kokālika, Purāṇa, nyagrodha, Amṛtodana, srotaāpanna, pārijāta/pāriyātra (cf. Pali pāricchatta), Mahāsāṅghika-vinaya, Bandhumat と訂正を施すべきであろう。また p.105 n.2 「指蔓 Manibhadra」という対応は正しくない。確かにここは鴛堀魔羅の師の名が期待されるところなので Maṇibhadra はよいが、指蔓は『今昔』の筆者の誤記であるから、その旨注記が要る。p.243 n.2 「富楼那」は『今昔』では「富那奇」である。『賢愚経』には <満願> という割注があるので対応形は必ずしも明確ではないが Pūrṇaka が想定される。これを訳者の様に 釈迦十大弟子の富楼那 (Purāṇa) と混同してはならない。薩随、p.86 n.5 貝多については、岩本裕『日本仏教語辞典』(東京：平凡社、1988) はしがき、6-7を参照。

- 13) 建設的な書評であれば、印刷上のことをあげつらうよりも、訳者が Unknown としているものについてサンスクリット形を与えるべきであり、またそうしてこそ書評者のいう日本のインド学者の貢献云々なる文と呼応する。例えば、p.121 n.1 Udrāyaṇa, p.236 n.1 Jāmbāla. また p.227 n.1 の注記は不明瞭であるが、『今昔』では「達王」、『法苑珠林』では「婆羅達」であり、後者には Brahmadaṭṭa が対応する。また同頁 n.2 Unknown は訳文中に指示する番号が見当たらないが、もし Hyakushi Buddha に対するものであれば、Pratyekabuddha である (逆に p.27 では本文中に n.9 の肩付き番号を与えるがその注はない)。
- 14) 書評者は Dykstra 氏が pp.21, 57 にて Śakro devanām indrah と表記しているかの如く述べるが、実際は p.21 では Śakro devānam indrah, p.57 では Śakro-devābam-indrah である。
- 15) ただし漢文書目の表記については色々と意見もあろう。仏教書仏教術語の読み方には国語学の成果と仏教界の慣用とが必ずしも一致しないこともあり、困難が横たわる。英訳書には Butsuhongyōshū-kyō (p.79 n.1), Zappōzōkyō (p.247) という表記が見られるが、慣用ではそれぞれ <ぶつほんぎょうじゅっきょう> <ぞうほうぞうきょう> である。
- 16) 干潟龍祥『本生経類の思想史的研究』附篇 (=東洋文庫論叢 35) (東京：東洋文庫、1954; 改訂増補 東京：山喜房, 1978), 114.
- 17) 『今昔』の出典ではないが、大系頭注、全表に挙げられていないパレレルもしくは allusion を記しておこう。『宝物集』(吉田幸一・小泉弘『宝物集<九冊本>』(=古典文庫 258) (東京：古典文庫、1969)、265). 『浮世物語』五 (前田金五郎『假名草子集』(=大系 90) (東京：岩波、1965)、251). 『和歌童蒙抄』三 (『国文学註解全書』(東京：国学院大学出版部、1910)、29). 『萬葉集註釋』二上 (同44). 『太平記鈔』三十七 (『同』(1908), 259-260). 更に詳しいリストは『プリンス通信』86-88 (Oct. 1995), §154にある。少なくとも日本文献に関しては従来のもよりも多数列挙されている。このリストに基づいて学友吉田幹子氏 (大阪外大) が研究をまとめる予定である。そこへの追加として、青江舜二郎「鳴神と一角仙人」『日本芸能の源流』(=民俗民芸双書

- 61) (東京：岩崎美術社, 1971), 35-71; 和泉雅人「一角獣研究 I—エンキドゥからリシュヤ=シュリングアへ—」『芸文研究』57 (1990.3)、211 (64)-195 (80)。
- 18) F. W. K. Müller, “Ikkaku Sennin, eine mittelalterliche japanische Oper (nebst einem Exkurs zur Einhornssage),” *Festschrift für Adolf Bastian zu seinem 70. Geburtstage 26. Juni 1896* (Berlin, 1896), 513-537.
- 19) J. Takakusu, “The Story of R̥si Ekaśṛṅga,” *Hansei zasshi* 13 (1898), 10-18; K. Wadagaki, “‘Monoceros’, the R̥sihe,” *ibid*, 19-24.
- 20) H. Lüders, “Die Sage von R̥ṣyaśṛṅga,” *Nachrichten von der königlichen Akademie der Wissenschaften in Göttingen, phil.-hist. Kl.*, Jg. 1897, 87-135 = *Philologica Indica: Ausgewählte kleine Schriften* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1940), 1-43; “Zur Sage von R̥ṣyaśṛṅga,” *NG1901*, 28-56 = *Phil. Ind.* 47-73.
- 21) D. Schlingloff, “Das Śaśa-jātaka,” *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens* 15 (1971), 57-67.
- 22) 例えば、花部英雄「昔話「月の兎」考」野村純一編『昔話伝説研究の展開』(東京：三弥井書店, 1995), 58-73.
- 23) いくつかの伝本についての書誌情報は、AI XI.
- 24) 増田良介「今昔物語集卷五第二四：亀、鶴の教を信ぜずして地に落ち甲を破る語」『別冊行動と文化』2 (1994.6), 1-19. Cf. also 『神戸親和女子大学研究論叢』28 (1995), 89-96.
- 25) 例えば、黒部通善「今昔物語集天竺考一巻一第一話「癸丑ノ歳ノ七月八日云々」を中心として—」『名古屋大学国語国文学』20 (1967) = 池上洵一編『今昔物語集』(=日本文学研究大成) (東京：国書刊行会, 1990), 123-140.
- 26) 同じ雑誌に載った書評でやはり不十分なものについて言及したことがある。H. Matsumura, “Miscellaneous Notes on the Upāliparipṛcchā and Related Texts,” *Acta Orientalia* 51 (1990), 63 n.10. 相応しい書評者が見当たらない場合には単に出版情報とする方が適当であろう。

IX. —T.S. エリオット雑録

IX.1 人間をとる漁師

T.S. エリオットの『荒地』(The Waste Land)の第二節にはA Game of Chess という題が与えられている。これは137行目のAnd we shall play a game of chess という文字面だけが僅かに関わるだけで、この節の主題とは関係がなさそうに見える(もちろんものの本などではチェスゲームは誘惑を意味していて、第二節は情欲の世界を描き出しているのも、それが象徴的で云々という説明があるが、難解で解りにくい)。自註によれば、Thomas Middleton の *Women Beware Women* (1657) に因んだということであるが、そこでは好色公爵がビアンカを誘惑するのであるが、ビアンカの義母はチェスに夢中で気が付かなくなって、誘惑の対極にあるものとなっている。Middleton にはそのものずばり *A Game of Chess* という作品があるので、そちらからヒントを得たのではないかとも思われるが、エリオット自身がそう注しているのであるからこちらの口挟むことがらではなかろう。この詩は超難解なものだから、詩人自身が読者のために注をつけてある。注を頼りに鑑賞する詩はユニークであるが、この注は詩の理解のために相当重要な手掛かりとなる。この点で脚注という形式がひとつのパロディーとなっている『文学部唯野教授』のおよそ内容的には不要の注とは事情を異にする。因にわが国での脚注付きの小説というのは『唯野』が初めてではなく、先例として『なんとなくクリスタル』がある。これの注は反響を呼んで、脚注だけ何度も読んで暗記してシティボーイになろうと言うシニカルな更なるパロディー化が相原ゴージ『文化人類ぎゃぐ』(東京：双葉社、1986)、15に現われる。ここはそういった議論の場ではないので、ただ Peter Rieß, *Footnotology: Towards a Theory of the Footnote* (Berlin: Walter de Gruyter, 1985) を挙げて脚注の意義の再考を促すよすがとしたい。

さて96行目にIn which sad light a carved dolphin swam という下りがある。註釈とか解説とかはここで例外なく Jessie L. Weston, *From Ritual to*

Romance (Cambridge: Cambridge Univ. Pr., 1920; repr. (= Anchor Books) Garden City, N.Y.: Doubleday, 1957) を引いて(この書が自註に挙がってるからであろう)、魚が生命の象徴であって、いるかが悲しげに泳いだというのは、生命がないがしろにされているということだと教えてくれる。ところで、魚/生命/人間という関わりについてであるが、ちょっと『福音書』を参照してみよう。ルカ 5:10 に「人間をとる漁師」 *ἀνθρώπους ζῶντων* という言葉がでてくる。収穫の全然無かったゲネサレ湖の漁師シモンがイエスの奇跡により舟が沈まんばかりの大漁を得た。ひれ伏したシモンにイエスが言ったのが上の言葉である。魚が人間生命の象徴になっている。これと同様の記事は、マタイ 4:19, マルコ 1:17 にも見られる(三福音書の対応記事を表解したものは色々ある。筆者が参照したのは、Albert Huck, *Synopse der drei ersten Evangelien* (8. Aufl., Tübingen: J.C.B. Mohr (Paul Siebeck), 1931), 22-23)。そしてこの魚と人間の関係というのも地球上に大きく広がっているものであって、『シャタパタ・ブラーフマナ』 1.8.1.1-10 などに伝えられる人類の始祖が魚により命を救われている伝説もそのひとつである。中国以来軸ものなどに釣人が描かれているのも同じ思想であろう。「おさかなに~なったわ~た~し~」というキャッチワードも魚のシンボリズムに属するものか否かの議論の対象となろう。

第五節は *What the Thunder Said* と題されているように、雷の啓示が主題になっている。しかも啓示のキーワードはサンスクリットで与えられている。従って解りにくいのは当然であるということで、自註が添えられている。本文は

Da

Datta: what have we given?

.....

Da

Dayadhvam: I have heard the key

.....

Da

Damyata: The boat responded

となっていて、それに対する自註は

‘Datta, dayadhvam, damyata’ (Give, sympathize, control). The fable of the meaning of the Thunder is found in the Brihadaranyaka-Upanishad, 5,1. A translation is found in Deussens’s *Sechzig Upanishads des Veda*, p.489.

とあり、下敷きにしたウパニシャッドの箇所をきちんと挙げているので、注解者達はこぞって言及しているの(但し上で“5, 1”というの単なるミスプリであろう。通常使用されているエディションであれば“5, 2”である [例えば Jagdīśśāstrī, *Upaniṣatsaṅgrahaḥ* (Dillī Motilāl Banārsīdās, 1970), I.122]。勿論ドイセンの独訳でも5,2となっている。尚この古い訳書は1版と3版からそれぞれリプリントが出ているので参照が容易である : Paul Deussen, *Sechzig Upanishad's des Vedas aus dem Sanskrit übersetzt und mit Einleitungen und Anmerkungen versehen*. Leipzig: F. A. Brockhaus, 1897; Nachdr. (= Indologische Texte 3) Bielefeld: B. Kleine Verlag, 1980; 3. Aufl. 1921 = 4. unverändert Aufl. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1963. 因に2版は1905年刊。“den Manen Arthur Schopenhauer’s”という献辞の付いたこの有名な訳書には英訳もある : *Sixty Upaniṣads of the Veda*, tr. by V.M. Bedekar and G.B. Palsule, 2 parts (Delhi: Motilal Banarsidas, 1980), I.508-509.)。

これを英語で論ずる場合は原文と表記法を同じくすればよいので問題は少ないが、日本語で論じたり、翻訳する場合には困難な問題が横たわる。越沢浩『T.S. エリオット『荒地』を読む』(東京: 勁草書房, 1992), 117にはとくどくとした解説が見られるが、件のキーワードには、ダッタ、ダヤドヴァム、ダミヤターという表記が与えられている。リズムを生命とする詩の中の言葉であるから、カタカナ表記するにあたっては細心の注意が必要であろう。ひとつひとつ見てゆくと、datta は दत्- の2人称複数命令法パラスマイパダ、dayadhvam は दय्- の2人称複数命令法アートマネーパダ、dāmyata は दम्- の2人称複数命令法パラスマイパダである。だから比較的ましなカタ

カナ表記は、ダッタ、ダヤドヴァム、ダームヤタというところであろうか。越沢氏の表記はわざわざ長母音を短くして、短母音を長くしてある。ついでながら最後の単語の語根母音の長音化については『パーニニ文法』VII.3.74に規定されている（शमामष्टानां दीर्घः श्यनि॥）。それではどうして一見些末とも思えることがらにこだわるのかと言うと、ウパニシャッドではこの三つは、ダームヤタ、ダッタ、ダヤドヴァムの順序ででてくるので、エリオットはこの順序を変えていることになる。この変更を越沢氏は「単に口調の問題であろう」とする。＜口調＞の問題であればこの詩を正しく朗読する試みがなされねばならない。従って音節の長短については殊の外敏感であらねばならない。この三つはウパニシャッドではまとめのところで連続して列挙されているけど、『荒地』では上に引いたように連続しているのではない（最後から2行目である432に連続して現われるが、ここは単に前を受けて繰り返しているに過ぎない。ここが先に書かれて、次に400行目以下が作られたというのなら話は別であるが、いちいちそういった特殊な事態を想定するものであろうか）。従って口調の問題にはなりえない。それではこの順序の変更はいかなる理由に基づくのかと問われると、今の筆者には答えが見い出せない。

さてこうした不用意さはここだけに限られるのではなく、深瀬基寛『エリオット全集』1（東京：中央公論社，1971），126-127にもダッタ、ダーヤズヴァム、ダムヤータなどとある。更に自註の訳には「『ウパニシャッド』五ノ一「プリハダラニヤカ」のなかにある」（136頁）という具合で惨憺たる有様である。『プリハドアーラヌヤカウパニシャッド』というのはひとつの本の題名であるから勝手に分断してはならない。福田陸太郎・森山泰夫『荒地・ゲロンチョン』（東京：大修館，1967 増補版 1972 新装版 1982），80では、辻直四郎『ヴェーダとウパニシャッド』（東京：創元社，1953），181-182＝『著作集』1（京都：法蔵館，1981），166という邦語で求められる最良のものを引用してあるので、キーワードの三語についてはよかったのであるが、原文で「ダ(da)なる一音節」とあるところを「ダー(da)なる1音節」と変更してわざわざ間違った長音化をしてしまった。柴田多賀治『エリオットと印度思

想』(東京：八潮出版社，1987)，44-46でも三語についてはローマ字のままなので問題はなかったのだが、ダーに関しては事態は同じである。更にこの三語を語った創造神ブラジャーパーティのことを常にブラジャーパーティと表記している。柴田氏も前記辻博士の書を挙げているから孫引きでなければこの名著を見ている筈である。英詩を論ずる英文学者達がカタカナ表記にかくも無頓着でいられるのは些か不可解の感がしないでもない。

IX.2 エリオットの背景をなす東洋

前節で見たように、T.S. エリオットがウパニシャッドを下敷きとして詩を書いたということはまことに興味深い。『荒地』についてはエリオット自身の筆になる自註により明瞭な事実として確認される。たとえ自註がなくとも同様なことはあるのではないかと、学者達の考察の対象となった。東洋思想との関わりということで日本の英文学者の好む題材であるが、村田辰夫氏の一連の論文がその成果の一部を成している。今回はそのうちのひとつである次のものに言及してみたい。

「T.S. エリオットの詩と印度・仏教思想」『開学十五周年記念論文集』
(茨木：梅花女子大学，1980)，1-76.

この論文は量的にも長大なもので、その内容も多岐にわたる力作でそこから学ぶことは多い。そこで若干気の付いたことを雑録風に述べておこう。

エリオットのインド文献の学習について村田氏は以下の如くに記しておられる。少し長くなるが句読点の誤植をも含めてそのまま引用してみよう。

すなわち、エリオットは、ハーバード時代に「二年間」(1911-1913) Lanmanのもとで同氏編するところの *A Sanskrit Reader* によって梵語を学んだ。このテキストは、もちろん梵語学習用のものであるが、パリー語も含まれていた(先の引用で、エリオットが“languages”と複数形でいうのはこれを意味する)なおこのテキストには「ヴェーダーの讃歌」や『ウパニシャッド』の一部、ヒンズーの叙事詩“Ramayana and Mahabharata”や『バガヴァッド・ギーター』の抜粋なども含まれていたことは注目し得る(“I read a litte poetry too”といているのはこれらを指している。)ここに彼の印度・仏教思想との出会いがあり、後に『荒地』のなかで『ウパニシャッド』を引用したり、『四つの四重奏』で『バガヴァッド・ギーター』のクリシュナに言及したりする原点があったといえよう。なおまたこのテ

キストには *Texts on Hinayana Buddhism* や *Shankaracharya's Crest-Jewel of Discrimination* もふくまれていた。³¹⁾

31) cf. C.R. Lanman, *A Sanskrit Reader* (Cambridge: Harvard University Press, 1967) (pp.15-16, 69-70)

この中で「パリー語」は「パーリ語」に、「ヴェーダの讃歌」は「ヴェーダの讃歌」に直さねばならない。これは誤植ではなくて、前節にも現われた母音の長短の自在な変換の類いであろう。それはともかくとしてこの文章にはエリオットのインド思想摂取に関わる重要なインフォメーションが含まれているのだが、惜しいことにその根拠や出典が明示されていないので、検証しにくい。Lanman の『梵語読本』は村田氏をご自分で調べられたのであろう。注記されているものはエリオットの時代のものではなく、リプリントであるから。初版は1884年にでていたのでエリオットがこれにより学習したという可能性はある (Herbert Howarth, *Notes on Some Figures behind T. S. Eliot* (London: Chatto & Windus, 1965), 200-202 にエリオットのインド学の先生だった人として Lanman と Woods の名が挙げられ、彼等について簡単に記されている)。それでわざわざリプリントを挙げている位だからそのリプリント版はばらばらっとでもめくったかと思うかもしれないが、それは疑わしい。というのはこの『梵語読本』に関する説明が正しくないからである。とにかく珍しいくらい沢山の間違いがある、というよりもあっているところが殆どないといった状況である。先ずパーリ語のテキストなどは全然含まれていない。ヴェーダの讃歌は『リグ・ヴェーダ』からの抜粋が31と『マイトラーヤニー・サンヒター』からの抜粋が申し訳程度に4あるからまあいいとして、ウパニシャッドは一編もない。次に叙事詩について *Ramayana and Mahabharata* と一括して挙げている意図は皆目わからないが、『ラーマヤナ』は全くない。『マハーバーラタ』の方は<ナラ王物語>の冒頭が少しだけ入っているので妥当する。<バガヴァッド・ギーター>は『マハーバーラタ』の一部であるからこういう列挙の仕方はおかしい上に、<バガヴァッド・ギーター>は収録されてはいない。だから「・・・これらを指している」と言ってるうちの「これら」と

は一体何を指しているのでしょうか。そして「ここに彼の印度・仏教思想との出会いがあり」ということであるが、そこまでに書名をあげて列挙されているものには仏教のものはひとつもない。インドのものだから仏教にも関係があるだろうというような立場でものを論ずるのでは、東洋思想の跡づけという作業に上では厳密さを欠く恐れがある。とにかく『バガヴァッド・ギーター』は収録されていないのだから、クリシュナに言及したりする原点はここにはありえない(クリシュナに関わる文献は別にギーターだけではないのではあるが)。ついでながら村田氏は別のところで「『バガヴァッド・ギーター』が、時に散文あり、時に韻文ありの体で書かれている」(p.37)と言われるが、(もし散文というのが「～は言った」というのではないとしたら)『バガヴァッド・ギーター』の散文部というのはどこにあるのか筆者は知りたく思う(全編これヴァクトラとかトリシュトゥップという詩形で書かれている)。最後に理由なく英語で挙げたあるふたつの項目が何を指しているか村田氏ご自身が了解しているのかどうかちょっと疑問ではあるが、これもこの読本には含まれてはいない。前者は小乗仏教の文献ということであり、この時代であるから漢語その他の阿含などではなくパーリ語のものが想定される(具体的には後述)。もしそうであれば初めのほうでパーリ語も含まれていたという表現と重複することになる。後者は『ヴィヴェーカーチューダーマニ』というヴェーダーンタ哲学の本である。一応誤解を避けるためにまとめておくと Lanman の『梵語読本』は古典サンスクリットとヴェーダ語のテキストの抜粋に語彙と注解を付した学習者用の読本で、上に指摘したもの他には『ヒトローパデーシャ』『カター・サリット・サーガラ』『マヌ法典』ブラーフマナ、グリフヤ・スートラ、金言が抜粋されている。要するにエリオットのインドに関する知識の起源をこの読本にすべて押し込んでしまう必要はなく、エリオットはこれは勿論学習したであろうが(この読本はとりわけアメリカの梵語のクラスで広く用いられ、一世代前のアメリカの梵語学習者の共通の知識背景を形成していた)、他にも沢山勉強したのだと想定すればよい(『ヨーガスートラ』とその註釈の場合は Woods の許で学んだことがはっきりしている。因にわが国の岸本英夫氏も同じ学者に『ヨーガスートラ』の指導を仰いでいる)。これは日記・書簡をも含めた彼のかきものを探れば、想定にとどまることなく確認へと至ることも可能であろう。この点についてはエリ

オットの伝記に詳しい専門家の示教を俟ちたい。

上の引用の中で村田氏は languages という複数形にサンスクリットとパーリ語を読み取ったわけであるが、これは正しいと思う。理由は次の通りである。『荒地』の第三節 The Fire Sermon は仏陀の火の説法が下敷きとなっているが、その典拠をエリオット自身がまたしても自註に明記している。それは Henry Clarke Warren, *Buddhism in Translations* (= Harvard Oriental Series 3) (1896; repr. Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Pr., 1922) である。この本はパーリ語で伝わる仏典の抜粋英訳集であるから、エリオットがこの英語の訳文とパーリ語原文を対照させながら読んだことは充分にありうることである。エリオットの自註は学術書ではないためかページ数までは明記されてはいないが、火の説法に関する箇所は 351-353 であり、これは既に Herbert Howarth, *op. cit.*, 204 などに正しく指摘されている通りである(但し Howarth もページ数をきちんと与えているのではなくって、Warren の訳書からの引用文を与えているので、上のページであることがわかる。尚 Howarth は p.372 でも Warren の訳書に言及しているが、そこで挙げているページ数 pp.215-63 というのは不可解)。それでこの箇所の原典は何かというと、『パーリ律』中の〈小品〉I.21 ([Ed.] H. Oldenberg, *The Vinaya Pitakam* I (London: Williams and Norgate, 1879; repr. PTS, 1969), 34.11-35.14. [Tr.] T.W. Phys Davids and Hermann Oldenberg, *Vinaya Texts* I (= Sacred Books of the East 13) (Oxford, 1881; repr. Delhi: Motilal Banarsidass, 1965), 134-135. 『国訳大蔵経』論部 14 (東京: 国民文庫刊行会, 1920), 44-46 [立花俊道訳]. 『南伝大蔵経』3 (東京: 大蔵出版, 1938), 61-63 [渡辺照宏訳]. I.B. Horner, *The Book of Discipline* IV (= Sacred Books of Buddhist 14) (London: Luzac, 1962), 45-46) である。だから前節でも引いた柴田『エリオットと印度思想』の p.31 にある「「ブッダの開教——マハーヴァッガー」第三唱節の最後の「燃焼の法語」という説明はちょっと不正確なところがある。マハーヴァッガと最後は短くして、第 I 部 21 章とでもするとよいであろうか (勿論第三唱節 *tatīyakabhāṇavāram* という区分もあるのだが、『パーリ律』の章節を示すのには適当ではないことは、281.16 に *paṭhamakabhāṇavāram* というのがまた現われていることでもわかる)。ところで 308 行に Burning burning burning burning という火の説法に基づく句がきてその次の O Lord Thou pluckest me out / O Lord Thou pluckest というのは、アウ

グスティヌス『告白』に依るものであるという。自註に「第三節の締めとして、東と西の禁欲主義者の代表の言葉が並んだのは決して偶然ではない」とあるように、エリオットは火の説法をどうやら禁欲の教えとみているらしい。これが当を得た解釈かどうかは検討の余地があるかもしれないけど、あるいは卓見であるかもしれない。というのも西洋の知識人の間には近代化に禁欲的プロテスタンティズムの合理主義が関連し、これは西洋においてのみ出現したという考えがあるからである。例えば Max Weber, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie* Bd. II (Tübingen: J.C.B. Mohr (Paul Siebeck), 1921), 234-237 がその典型であるのだが、それによれば原始仏教の救済理論は反禁欲的で、現世内的動機づけがなく、いかなる合理的行為も否定される(但し筆者ははこの見解に賛成しない)。こうした考えが優勢ななかで、どのようにしてエリオットが火の説法に禁欲主義を見い出したかをたどるのもひとつの課題となりうるかもしれない。

ついでに『告白』の依拠箇所についても触れておくと、前にも掲げた福田・森山『荒地・ゲロンチオン』p.67に「Confessions XXXIV.53からの引用(原注)」とあるが、原注すなわち自註では Confessions と言うだけで章節の番号は挙げてはいない。『告白』は十三巻までしかないので上の表記ではわかりにくい。上記書には「Everyman's Library 版による」として問題となる箇所の英訳文が引いてあったのでそれを調べたところ、*The Confessions of St Augustine*, tr. by E.B. Pusey (= Everyman's Library 200) (London: J.M. Dent & Sons Ltd, 1907, 1957), 238 にあり、同書の区分表記に依れば Book X, [XXXIV.]53 ということであった。Pusey 訳は Book X 迄は再刊されている: The Harvard Classics 7 (New York: Collier & Son Corporation, 1909, 1937), 188. 和訳本では、第十卷第三十四章五三といった表記になっている: 『アウグスティヌス ポエティウス』渡辺義雄訳 (=世界古典文学全集 26) (東京: 筑摩, 1966), 176. 『告白』下 服部英次郎訳 (=岩波文庫 33-805-2) (東京: 岩波, 1976), 68. 『アウグスティヌス』山田晶訳 (=世界の名著 14) (東京: 中央公論社, 1968), 381. 念の為ラテン語原文の当該箇所の確認並びにその他の翻訳を記しておこう (SA = S[ain]t Augustin[e], C = Confessions):

[Ed.] Martinvs Skvtella, *S. Avreli Avgvstini Confessionvm Libri XIII* (= Bibliotheca Scriptorvm Graecorvm et Romanorvm Tevbneriana) (Stvtgardiae: Tevbner, 1934, 1981), 249-250. [Ed. & Tr.] W. Watts, *SA's C II* (= The Loeb Classical Library 27) (London: W. Heinemann, 1912, 1961), 172-175. Pierre de Labriolle, *SA C* (= Collection des Université de France) (Paris: Les Belles Lettres, 1926, 1969⁷), 279-280. E. Tréorel et G. Bouissou, *Les c* (= Bibliothèque Augustinienne, Œuvres de SA, 2^{ème} série 14) (Desclée de Brouwer, 1962; repr. Études Augustiniennes, 1992), 236-237. [Tr.] Tobie Matthew, *The C of SA, revised and emended by Dom Roger Hudloston* (= The Orchard Books) (London: Burns & Oates, 1923, 1954), 308-309. J.G. Pilkington, *The C of SA* (= Books in the Black and Gold Library (New York: Boni & Lireright, 1927), 258-259. Whitney J. Oates, *Basic Writings of SA I* (New York: Random House, 1948), 173-174. Vernon J. Bourke, *SA C* (= The Fathers of the Church: A New Translation) (Washington, D.C.: The Catholic U. of American P., 1953, 1966), 310. Jan Czuj, *Swiety Augustyn Wyznania* (Warszawa: Pax, 1954), 233. Albert C. Outler, *A: C and Enchiridion* (= The Library of Christian Classics 7) (London: SCM P., 1955), 232-233. R.S. Pine-Coffin, *SA C* (= Penguin Classics) (Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1961, 1975), 240-241. Henry Chadwick, *SA C* (Oxford: OUP, 1991), 210.

【付記】

*) 前号p.21 AA V標題のextcretataはexcretaの誤植です。お詫びして訂正します。

**) AA VIII執筆時には、Robert Hopkins Brower, *The Koñzyaku monogatarishū an historical and critical introduction, with annotated translations of seventy-eight tales* (Univ. of Michigan, 1952 [Diss.]) は参照できませんでした。これは未出版の学位論文で、その後マイクロフィルムにて閲読する機会を持ちました。標題にある様にかかなりの数の今昔話の英訳を含んでいて重要な研究なのですが、700頁を超える大冊なので、これの紹介は機会を改めて致したいと思えます。

***) AA IXに関連して、本学英文学科の松田誠思先生はエリオット自身による『荒地』の朗読テープを御貸与下さいました。厚く感謝申し上げますと共に本稿にはそれを十分に生かし切れなかったことをお詫びたく思えます。その後音盤と理論に依拠した原孝一郎「T. S. エリオットの詩における韻律とリズム」『紀要』(成城大学短期大学部) 7 (1976), 27-78を一読し学ぶところが多かったので、他日問題の箇所を再論できることを希望しています。

****) AA VII nn.4, 9, 17に挙げた書の著者であられる静岡大学名誉教授伊藤正義先生は1995年9月3日に永眠なされました。筆者にとっては突然のことでしたので、悲しみに堪えません。Disciplina Clericalisの訳業を測らずも筆者と殆ど同じ時期に進めていらしたことを御縁として、本誌にも度々その御尊名を挙げさせて頂きました(11(1991), 73; 12(1993), 71-72)。寛大な先生は同時進行の拙訳にも励ましの言葉を下さされ、またその他の拙論に対しても御批評を忝けなくしました。パーリジャータカの平行に就いてお尋ね下さったこともありましたが、分かる範囲でお答え申し上げましたところ、折り返し丁寧な御返書と共に、未出版の原稿をお恵み下さいました。本年夏頃はお元気な御様子で、静大退官後時間が取れる様になったからと、これからの御研究や翻訳のプランなど書いてこられました。静岡の川合にある御自宅にも来る様にとお勧め頂いたのですが、遂に果たすことなく過ぎてしまい、悔やまれること多大なものがあります。在外のため最後のお別れもできず、不義理の限りを尽くしてしまいましたが、改めて中英語文学のみならず、ラテン語文献にも多くの貢献をなされた先生の学問の足跡を偲ぶと共に、謹んで御冥福をお祈り致します。

*****) 原稿の打出し整理にあたって本学情報処理準備室の安井茂美さんの助力を忝けなくしました。いつも変わらぬ適切なる御高配に深甚なる謝意を表します。